

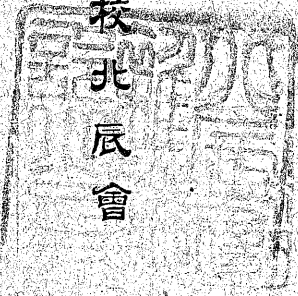
明治二十九年四月三十日發行

(非賣品)

# 北辰會雜誌

第拾號

第四高等學校北辰會



# 北辰會雜誌第拾號目次

## 論 說

生物學上種の觀念の變遷

生物の進化(承前)

時習寮

莊子管見(第八號續)

## 文 苑

對雨思梅花

寄落花

歌十數首

俳句十數句

四時佳興亭記

蓬萊遊囊

詩若干首

齋 藤 賢 道

九 山 環

河 原 始 二

春 秋 原 在 文

木 かくれ 生

蓬 生 庵

村 上 函 峰

香 陽 陳 人

## 雜 錄

もだまの說

太古希臘物語集

法窓餘錄

燒李園兒

花供養

小蓬萊春旅記

懷舊

くやみ艸

就俳人一茶坊

## 批 評

本誌第九號を讀む

## 雜 報

初見の辭、討論會、第二回國民射擊會、春季休暇、故有栖川宮紀念樹栽培の檄、其他數件

K O 生

浦 井 恒 堂

乾 燥 生

淡 島 太 瑯

青 界 居 士 蛾

弄 界 居 士

九 華 生

不 眠 坊

桐の舍主人

# 北辰會雜誌第拾號

## 論 說

### 生物學上種の觀念の變遷

齋 藤 賢 道

百般の學術は、時に或は不合理なる者を眞理と稱し、或は牽強附會の説を信し、爲めに諸種の發見研究を妨害中止せしめたるもの、其例蓋し鮮少なからず。彼の拾八世紀間、歐洲化學者の信用せし「フロツストン、シテリー」の如き此類なり。然れども一度此を看破して、他に眞理の根據基礎を定むる時は、反て實に著大なる功力を其學術上に及ぼすとあり。茲に述べんと欲する生物學上種の觀念も、古より數回の變遷を経たる者なれども、今や進化論の力によりて漸く確定するに至れり。今其變遷の大略を摘記せん。

抑も生物學上、初めて種と云ふ術語を用ゐたるは、實に希臘の有名なる「アリストートル」氏其人なり。氏は當時醫學者として、且つ哲學者博物學者として、名聲嘖々たりき。此を以て氏か著書は實に莫大の者にして、諸學に通して一々之を枚舉するに遑あらずと雖ども。其中動物分類法に關する者は、即ち動物の歴史(History of Animals)是なり。

此著書は凡て十篇より成立する者にして、其第一篇六章に於て氏は動物の分類を掲げ、動物界を有血動物無血動物の二に區別せり。

甲、有血動物

(一)胎生なる四足獸(現今の哺乳動物)、(二)鳥類、(三)卵生なる四足獸、(四)魚類、(五)鯨類  
乙、無血動物

(一)軟體動物(現今の頭足類)、(二)多足にして柔軟なる動物(現今の高等甲殼類)、(三)多足の虫類(現今の百足、蜘蛛及昆蟲類)、(四)無足なる有殼類(現今の双殼類、腹足類、棘皮動物等)

右の如く氏は、血液の有無に依て動物を分類し、上は吾人々類より下は魚類に至る迄を、有血動物となし。其他の動物を以て、無血動物に屬せしめたり。氏の分類法は、現今の生物學上の智識を以て判斷すれば、實に誤謬の大なるを免れずと雖ども、氏の博學多識なるを知るは、氏が諸動物に就ての實驗なりとす。即ち氏は既に吾人々類を以て動物の一となせり。動物歴史第二篇第三章第六節に曰く、「又た人類は完全なる動物なれば、其軀の上部、即ち頭より肛門に至る迄の部分、其下部に比すれば稍短く、他の有血動物と反對す」と。又た鯨を全く胎生の四足獸となし、後世に至りて反て、之を魚類に加入したるものなり。其他章魚の交尾器を發見し、鮫魚胎盤の事實の如き、後人が發見せりとする者も、已に「アリストートル」氏の知れる所なり。

「アリストートル」氏は、又た單に事實を敘述する人なるのみならず。事實に就て務めて其理由を研究し、動物は卵生にまれ、胎生にまれ、皆最初より其親たる動物の形狀を有するものにあらざして、卵の時には、軀内の諸機官更に之れなく、逐次に發生し、初めに心臟を生し、次に腦を生し、而して腦の兩側には眼目を生すと云ふか如きは、實に現今發生學の證する所と同一なり。又

氏の説によれば、一種或は一屬の動物は、無究に消滅するものにあらざと雖ども。一個軀の動物は子を産みたる後に必ず死するものなりと。氏は斯く各種の動物に就て研究せしとあれども、未だ種に就て一定の解釋を試みざりき。

「アリストートル」氏の著書は、其當時にありては實に有力なる者にして、後世の學者は唯其書を反譯し、若くは其註釋を試みたるのみにして、氏の死後四百年を経て、「プリニウス」(Plinius)氏出て、當時の學術を蒐集し、之を記述せり。然れども氏の分類は、空中動物、水中動物、陸上動物の三種に大別したるものにして、少しく「アリストートル」氏と異れり。此の如くにして、諸學者敢て自ら研究に従事するとなかりしかば、生物學は少しも進歩發達するとなく、加之不幸にも其頃より耶蘇教は漸次蔓延し、聖書を主とし其に述る所是れ神言となし、敢て吾人々類が疑問を入るべきものに非すとなし。大に生物學進歩を妨害せり。此を以て生物學者も亦聖書を眼目とし、聖書以外に超然立て研究するとなく、人軀解剖の如き事は、少しもなしたるとなかりき。其後千二百年代に「テクセン」氏(Tychsen)は、「聖書に載する動物の歴史」と題する著述ありしも、固より科學的真理なく、奇異不可思議の書なり。

降りて千五百年代の末より、千六百年代の初に至り、閨龍の米國發見より、航海術頓に進歩し、亞米利加、亞弗利加等の遠地の動植物は多く集り、歐洲にて未だ曾て見ざる新種は、續々蒐集したるより、學者の手に入る所の生物の種類も、非常に増加したり。中にも千五百十七年「ルーテル」の宗教革命以來、大に羅馬法王の勢力を衰微せしめ、科學の研究も其束縛を脱し、自由なる

事業をなすの機會を得たり。

十六世紀に、ピサ、ローマ、等に住し多く動植物を蒐集したる、「シザル・カサス」氏(Andreas Caesalpinus)は、始めて生物の分類法に著明なる進歩を與へたり。然れども氏の説は、當時未だ世人に了解されず、漸く千七百年代に至りて、「トルン・フォルト」氏(Tournefort)は、始て其著書に於て「シザル・カサス」氏の分類法を採用し、之を世人に紹介し、深く留意注目せしめたり。元來此等兩氏の分類は、僅に屬(Genus)に止まり、種(Species)に至つては、解説不充分なり、加之屬種の名稱等も、誠に複雑し明ならず、故に従前に比すれば、大進歩なれども、未だ之を學術上に使用するとなかりき。然るに交通の頻繁なるに従ひ、歐洲に蒐集する生物の種類は、益々夥多になり、世の學者は此等種類を、類別羅列するの必要を感じ、終に千六百二十八年英國の「レー」氏(John Ray)は、種の説を著し、以て大に生物學の進歩を助けたり。抑も氏の説たるや、種は同一物たる父母より生ずる者となすに在り。蓋し種と云ふ術語は、固と古代に「アリストートル」氏の用ゐたるありと雖ども、一定の意義を附して之を説明せしは、氏を以て嚆矢となす。然れども「レー」氏と雖ども、固と種は總て多少の變化を爲さざるを得ざるものと信したるか如し。

其後凡そ百年を経て、「リンネ」氏(Carl Von Linné)千七百七十七年より始て種に就て正確なる説を立て、以て今世學問上に使用する二名法を發明し、且つ簡單にして便利なる分類法を作り、以て蒐集せる動植物に都合能き名稱を附し、分類したるのみならず、又た新たに集り來たる生物も、此法によりて分類するを得たるを以て、當時生物學上に大功ありたり。是れより後氏の二名法を用

ゐて、新に發見されし生物を命名したる者非常に多く、從來の不整頓なる生物の種類も、此に依て幾分か秩序あるものとなるに至れり。然れども氏の二名法は、固より人爲分類法にして、自然と異なる所多きは免れざる所なり。且つ當時學術の度猶卑く、自然分類法の如きは假令是れ有りとするも、容易に生物を分類すると能はざりしならん。加ふるに氏の二名法は、誠に簡單にして一目能く生物を知るに便なるとは、恰も吾人々類に姓名あるか如し、此を以て生物の分類にも、稍其順序を得たり。故に氏は生物の血統等は、更に措て問はず、恐くは生物血統の如きは、氏の腦中に浮ばざりしならん。何となれば、氏は深く聖書を信したるを以て、地上に存在する生物の種は、皆地球創造の六日間、上帝の創造する所に於て、爾來今日に至る迄、些少の變化をなすことなく、親子を産み、子孫を産むとは、毫も太古に異なるとなく、ノアの時に當り、洪水の難を免れて、アララツト山上に逃げ出て世に存在する生物を名けて、今日吾人か種と稱する者なり。此理を以て生物の種は、萬世不易物にして、今世現存する生物は、其數曾て上帝の創造せる者と一も増減あるとなしと。氏は時々種類不變の説より、少々異りたる考を起したるとあるか如し。何となれば、「チグリー」氏の述ぶる所に依れば、「リンネ」氏は屢々種の始原に就て説を附したれども、全く之を眞なりとするを敢てせざりしと云ふと云へり。其説に曰く、生物が上帝によりて創造されたる始に當りて、一屬に只一種ありたるものなり。然るに現今一屬中に數種あるは、皆他屬の種と交合したるにより生したる間種(Hybrid)なれども、種の數は若の如くにして、萬世不易増加するものに非ずと。



斯くする内に、地質學は大に進歩し、地球の表面は、種々維多の地層より成立する者にして、地層中に含有する生物の種も、今世地上に存在する所の種と、全く異りたるものなりとせり。故に從來學者か千有餘年間信服し來れる種類は、不變にして、凡て上帝の創造に係ると云ふ説は、大に其影響を蒙り、千八百九年、佛國の碩學「ラマ르크」氏(Lamarck)は其の著書なる、動物の哲學(Philosophie Zoologique)に於て、大に「リンネ」氏の種不變説を駁し、種と云ふ者は自然の原則に依て生したる者にして、決して聖書に説くが如き、自然外、即ち上帝の創造に係るが如き者にあらすして、生物は總て古代より連綿として、繼續し來りたる中に、初には其構造甚だ簡單なりしも、地球の變遷と共に漸次高等に進み、遂に今日の狀態に變遷し來れるものなりと云ふとを示せり。而して其變遷の源因は、主として生物の機官の用、不用及遺傳に依るものなりとせり。嗚呼氏は既に耶蘇敎主義を脱し、科學的に自身種の觀念を説明し、生物學者の迷夢を攪破せり。其功亦た大ならずや。

此と同時に、彼の有名なる「チャレス、ダーウヰン」氏の祖父「エラスマス、ダーウヰン」氏(Erasmus Darwin)も、「ラマ르크」氏と大同小異の説を稱へ。獨國の詩人「ゲーテ」(Goethe)氏も、亦動物の祖先は同一にして、漸次進んで高等となるに當り、一は高等植物となり、一は動物となり、動物の分枝は愈々分れ、終に進んで人類に至りしとを説けり。其他哲學者として名高き「セリング」氏(Schelling)は、生物は「一に皆變遷進歩し來れる者とし、「オケン」氏(Oken)は其説を事實上に證明し、「二氏共に地球上の現象を、自然の理に依て説明するとを務めたり。

「ラマ르크」氏と、同時に佛國の「コンチア」氏(Geoffroy st. Hilaire)は、「ラマ르크」氏の説を次ぎ、種類變遷の説を主張したり。然れども「ラマ르크」氏の説と異なるは、其變遷を以て専ら外界の變遷に因する者とせり。此説を抱きたる人には、尙ほ他に「ティン、ヘルバート」氏(Dean Herbert)、「グラント」氏(Prof. Grant)、「フナム、ブッフ」氏(Von Buch)等の諸學者ありき。

右の諸説に反し、旗を一方に翻したる人は、有名なる博物學士「キュビアー」氏(Georg Cuvier)なり、氏は多才高見にして、嶄然として頭角を表し、「ラマ르크」諸氏の眞説も遂に世上學説外に出され、巴里府に於ける有名なる爭論も、遂に「ヒレリア」氏の敗となれり。然れども「キュビアー」氏は、多く古生物學を研究したるを以て、敢て「モゼス」「リンネ」の説を信ずるとをなざず、曰く天帝は地球創造の後、屢々大變動を起して、生物界を皆滅亡し、更に又新創造をなしたり、此を以て今日存在する生物の各種は、孰れも彼の聖書に述ぶる、大洪水以後のものなりと信したり。故に氏は今世々上に存在する生物の種類は、相互に關係を有せざるものなる而已ならず、地層内に化石せる動植物の各種は、其の異なる所の地層内にある者と、皆少しも關係連絡なく、今世の者とは、固く關係なきものなりとせり。其の以後氏の説を主張したるは、有名なる「アガシツツ」氏(Louis Agassiz)にして、其の著書 Lake Superior の三百七十七頁に其の説を述べたり。然れども、諸學益々進歩するに従ひ、「キュビアー」「アガシツツ」氏の説も漸次地を拂ふて消滅し、地、古生物、形成、生理等の學術研究の結果は、大に其等の説に反對し、英の地學者「ライヤル」氏(Lyell)の如きは、早くも「キュビアー」氏の地層説を駁し、其著書 Principles of Geology に於

て、地層の成立を説き、地層は相互に關係なき者に非ず、皆始より逐次變遷したるものなり、其他高山の起源等は、全く自然外の力を用ふるものにあらずと、明白に「キニピア」氏の誤謬を示したり。

以上述べたる如く、種に就て生物學者間に其確信する所を異にしたるも、遂に千八百五十八年に當りて、「ダーウキン」、「ウアレース」兩氏の、自然淘汰説(Theory of Natural Selection)にLinnean Societyの論文として呈出され。其翌年「ダーウキン」氏の種原論發兌され、同年に Carl Ernst Von Bear 氏も、種は總て僅少なる其祖先より生出し來りたるものなりとの説を、解剖學上より主張せり。此に於てか完全なる、生物學上の種の觀念を確定せり。

抑も「ダーウキン」、「ウアレース」兩氏の所論は、現今吾人か進化論と稱し、頗る尊奉愛重する所の學說なり。兩氏は生物各種の變遷を自然淘汰に依由する者となし、而して自然淘汰の原理の基礎たるべき、生物界一般事實を、左の二件とせり。

(一)生物は幾何級數を以て繁殖し食物は算術級數を以て増加すると

(二)生物は其親たる生物の形質に僅少の變異を生し之を遺傳すると

第一則より見れば、生物間には必ずや生存競争を生すべし、何となれば生物の子孽は、幾何級數を以て繁殖すと雖も、食物は算術級數を以て増加するにより、生物間に食物の競争より、殺戮さるゝものあり、其食物の欲乏より死亡する者あり、其他寒暑風雨等の自然の勢力に打勝つと能はずして、絶滅する者其數を知らず、此を以て生物は常に直接若くば間接に、自己体外の有機無機

界に關係し、此と競争する者なり。而して其外界の變遷に適應し、之に堪ゆる者實に九牛の一毛に過ぎず。然らば則ち一は能く其生を保ち、他は堪へずして絶滅するは何故ぞや、他なし生物各種の個體は精密に等しきとなく、或點に於て差異あればなり。故に一生物の生する、子孽中に能く外界に適する者と適せざる者となり、強壯なるあり、羸弱なるあり、其他體色を以て他物より捕獲さるゝの保護防衛となし、或は鋭眼にして他物を捕獲し得るもあり、概言すれば生物の差異にして、其種に利あるものなれば能く生存し、其子孫を後世に残し得るものとす。

次に第二則を考ふるに、生物は皆其形質を子孫に遺傳すと雖も、外界は不絶些少の變化を起す者なれば、一生物が生ずる種も、相互に同等なるとなく、僅少に變異する者なり。其變異は生物の繁殖に隨伴して増長し、或る情勢に於て其生物に Fitness を來す、特質は其何たるを問はず、無究に伸長し外界に對し必要の極點に達し、他に其生存競争に便益を與ふる性質あるに至らば、轉じて其方向に進みて變化する、新種は益々生存し、始めに一方に進み、後には地方に向ひ、其結果は終に祖先生物より、非常に變異せるものとなるなり。

右の二則を以て、今日の生物は往古の生物より、漸々變遷し來りし者にして、後來の生物學上に稱する種と云ふものも、決して萬古不易のものにあらず、又た天然に存在する者にあらず、只人間か都合好き勝手に稱するものなり。然れども外界の變異か生物に變遷を生するものは、實に漸次に來るものなれば、一種生物が生ずる所の生物は、各幾分か異なる所ありと雖も、相互に能く類似し、共に交尾して能く繁殖するものなり。動物學者「スワインソン」氏(Swainson)種の定

義を下して曰く、

A species, in the usual acception of the term, is an animal which, in a state of nature, is distinguished by certain peculiarities of form, size, color, or other circumstances, from another animal. It propagates, after its kind, individuals perfectly resembling the parent; its peculiarities, however, are permanent (Geography and classification of animals, Page 350)

然れども、生物の生存は其存在する外界に關係ある者なれば、一種の生物にして雌雄の形狀大に異なる者あり(Sexual Dimorphism)、時候により異なる形狀を現す者あり(Seasonal Dimorphism)、或はミンハギ等の類には三様の形態を有し(Trimorphism)、或は異種にて外形大に他種類に類似する者あり、又た水母類の如く、世代の交順をなし一代の生物は、次代の生物と其形狀を全く異にする者もあり。

以上述べたる如く生物の種と云ふ者は、幾分か定限ある者なれども、萬古不易なるにあらず。外界の變遷により、不絶變異し其變遷小なる時は、變種(Variety)と名け、大なる時は新種となし、屬となす等凡て人爲の者なり。然れども生物學者は豈に秩序なく、無暗に生物を分類するものならんや。唯た各種血縁系統の遠近により、分類するものなり。進化論に依れば、生物界は大樹木の如く、其根は一なれども、其變遷進化するに従ひ、數個の大枝を生じ、大枝は多く分枝して梢となるか如し。故に生物の種を梢の末端を以て現はす者とせば、大梢より生ずる所の梢を

悉皆集めて屬となし、同枝より生ずる大梢を集合して科となし、漸次進んで目となし、綱となす。故に種屬科目綱の區別は、學者によりて大に其觀念を異にし、甲者の種と看做す者をも、乙者は屬とするあり。吾人々類に就て例するに、或一種の學者は、全世界の人類を以て一種とし、白色黄色等の諸人種は、只其變種たるに過ぎずとなし、或他の學者は、人類を以て一屬内の數種とするか如し。由此觀之、世界上に生存する者は、單に其個體あるのみにして、種屬等の區別は、全く吾人か便利上より附したる名目に過ぎず。然れども今世梢の末端に位する種も、不絶外界の變遷に應化して變異する者なれば、萬世の後は又分れて數種となり、數屬數科となるや測知す可らず。只た此個體は、間斷なく變異し行くものなれども、其變遷は漸々に起る者なれば、一世一代を以て之を見ると能はざれども、長年月間に、其各種の變遷進化の理は、今や殆ど之を信ぜざるものなく、生物學上種の觀念も、其科學的明證を以て確定されたるは、蓋し亦「ダーウ井ン」「ウアレース」兩氏の偉功と稱すべし。

嗚呼「ダーウ井ン」氏及び「ウアレース」氏は百戰百勝の勇將にあらず、巨萬に誇る富豪にあらず、雄辯議場を覆す政事家にあらず、而も人の知らざる僻村に隱遁し、唯筆の力を借りて世界を聳動す。豈に文明界の美果と云はざる可んや。

(完結)

## 生物の進化 (承前)

丸 山 環

前來陳述せしか如き生存競争及生物之變化ありて後自然淘汰の行はるゝものにして生物中新事情

に適合せるものは生存競争場裡に勝を占め其子孫愈繁茂し新事情に適合せざるものは敗を取り其血脉次第に衰微す是則ち謂ふ所の自然淘汰なり

此自然淘汰に對して人爲淘汰と稱するものあり之を分ちて左の二とす

### 第一 無意的人爲淘汰

#### 第二 有意的人爲淘汰

先づ初めに無意的人爲淘汰とは吾人の飼養する動植物間に行はるゝ淘汰にして殊更に人爲淘汰を爲すの意なくして自ら其間に淘汰の行はるゝものなり例せば美果を荷ふ植物を分植するが如きは或は其間に欲望の存するあるも決して之を淘汰するの意志あるには非ざるなり 次に有意的人爲淘汰とは異種異形の者を得んと欲する意志よりして故意的に淘汰するを云ふ喻へは異種の二兎を配合して奇兒を得んとするか如きこれなり 以上の如く細論せば有意的無意的の二人爲淘汰ありと雖も要するに人爲淘汰は人爲に依りて淘汰せらるゝものなれば自ら意志或は欲望の其間に存するを免れず之に加ふるに人爲淘汰の結果は大抵人間の利となるものにして生物其物に取りては寧ろ害となるも利となること少し是れ實に人爲淘汰の大に自然淘汰と異なる處にして自然淘汰は人爲に依らずして天然に淘汰せらるゝものなれば其間に意志欲望の存することなく且つ淘汰の結果は多くは生物の利となるものなり人或は云はん自然淘汰は幾多の星霜を費して徐々たる變化を生し人爲淘汰は僅かの日子に依りて變化を生するか故に自然淘汰の結果は遠く人爲淘汰の結果に及はざるか如しと是れ實に皮想の見のみ抑人爲淘汰は但に生物の外部に顯はれたる點に付ての

淘汰なれば假令必要な變化あるも毫も内部の機關に付て淘汰する能はざるものにして且つ飼養せらるゝ生物は幾分自由ならざる點あるを以て嚴密に人爲淘汰を行ふ能はざるなり何となれば人間の畜養する生物に於ては假令其中に多少の異性を有するものあるも皆之を同事情の下に置き之に給するに同住處同食物を以てするか故に生物は往々其特性を屈することなきに非らず加之生物中多少羸弱の者あるも之を淘汰せずして反て之を保護し特に之に注意を與ふることあればなり 然るに自然淘汰は實に外部の淘汰のみならず假令内部の機關の變化たりとも生物に必要あるときは之を淘汰するを得べく且亦天然の情態にある者は自由なるを以て自ら淘汰の嚴に行はるゝものなり其故云何となれば自然の情態にある生物は皆各自の特性を實行し得べくして己が欲する處に棲息し己が好める食を求め毫も其性を屈するなく從て多少不完全なるものは直に淘汰せられ其局益當時の事情に適合するものを生すればなり噫自然淘汰の人爲淘汰に勝るは甚だ大なりと謂ふ可し

以上の自然淘汰及人爲淘汰の外に氏は雌雄淘汰の説を立つ吾人若し眸を放ちて生物界を觀察せば男性或は女性に限りて生物の特性の顯はるゝを見るなる可し此の如く雌雄兩性の各其狀を異にする所以を説明せん爲に氏は更に此説を唱ふ而して此雌雄淘汰は自然淘汰の如く他の種類の生物或は外界の事情に關する淘汰にあらずして雌雄各己の間に行はるゝものなれば雌は争て雄を得んことを欲し雄は亦雌に媚ひ以て其歡意を得んことを求む此の如き競争には或は色の美を以てするあり或は聲の好を以てするあり其局遂には勝利者は男性或は女性を得て愈其子孫を繁殖せしめ敗を



招きしものは唯男性若くは女性を得ざるのみにして命を失ふことなければ雌雄淘汰の結果は遠く自然淘汰に及はざるなり

### 第三 兩説の關係

次に兩説の關係を論ぜは「ラマーク」氏の主唱せる用不用より得たる性は親子の順を追て遺傳するときは自ら其間に自然淘汰の行はるゝものなり今假りに使用に依りて腕の筋肉發達したりとせんか此事果して生物に利あらは淘汰に依りて益此性を積重ね可き理なり尤も使用に依て發達すと云ふことなきも淘汰の行はれざるには非ざるなり何となれば筋肉の變化あるものは次第に淘汰せらるゝとせば殊更に使用の効力を借らざるも可なればなり見よ彼「マデーラ」島に産する蟲類の翅の極小なるを蓋し是れ此地は風強くして能く飛揚する者は海中に吹飛ばされ生命を失ふが故に可成其翅を使用せざらんとを務む依て此島に棲息せる蟲類の翅は發達せずして次第に退化せるものなりと是れ「ラマーク」氏の不用説より説明せしものなり併し乍ら「マデーラ」島の生存競争場裡に於ては飛揚せざる蟲類反て勝を占むとせば自然淘汰説に依りて翅の小なるを説明し得べきなり彼鼯鼠の兩眼の非常に小さくして殆んど閉目せるが如きも地中に於ては光線なきが故に自ら之を使用せざる結果なりとして説明し得るも此動物は常に地中に住するか故に兩眼開けるとときは充血して病を招く患あるを以て便利の爲に閉目したりとせば自然淘汰説にて説明し得べきなり其他米國「ケンタツキー」洞及び歐洲「マンモス」洞中に住する蝦魚の盲目なるか如き或は「ヤドカリ」の腹部の柔滑なるか如き皆不用説に依て説明し得べきも淘汰説に依て説明する能はざるには非ざるなり

全軀生物の諸機關中之を使用するものは次第に發達し之を使用せざるものは愈退化するものにして暗黒なる洞中に於ては眼はこれ一無用物に過ぎされば無用の「エテルギー」を之に費すよりも寧ろ洞中に於て必要な機關の爲に此「エテルギー」を費すことは大に此動物を利するものなれば暗洞中に生活する蝦魚は盲目なるなりとするは自然淘汰説に依て説明せるものなり

今「ワイズマン」氏の「パンミッキシー」の説に依るに生物の諸機關は用ある間は自然淘汰の範圍内にあるものにして不用となれば其範圍外にあるものなりと 此説よりして考ふるに生物の機關は用ある間は大抵淘汰の範圍内にして若し淘汰に關係せざる機關あるときは自ら退化すべし是れ全く「エテルギー」の之に及はざるが故なり 此の如く論ずるときは「ラマーク」氏の主唱せし用不用説の力を借らざるも「ダルウ井ン」氏の自然淘汰説に依りて能く生物の變化を説明し得べきなり併し乍ら用不用に依りて生物機關の進歩及退化を來す上に自然淘汰に依りて生物に利あるものは益發達し利なきものは益退歩すと見れば一層完全に生物の變化を説明するを得べし故に「ダルウ井ン」氏も強て「ラマーク」氏の用不用説を破する要なしとして其説をも採用せられたり

### 第四 兩説之優劣

以上生物の進化に關せる兩説の概略並に其關係を略述せしと雖も蓋し其間に優劣なきに非ざるなり「アルフレッド ラッセル ワレリス」氏は其著書「ダルウ井ニズム」の中に左の論文を記載せられたり

淘汰の結果は遙に用不用の結果に勝る

夫れ各時代に於ける生物機關不用の結果は甚た僅少にして全く之を子孫に遺傳すと云ふは吾人の深く信する能はざる處なり吾人其機關使用の結果の小さなを知るに由なきを以て次に「ダルウヰン」氏の實驗せられたる機關不用の結果を述べんと欲す今養禽場に於て飼養したる鳩或は天然の情態にあるも飛行すること稀なる鳩の如きは全胸骨の七分の一乃至八分の一の長を減じ且つ肩胛骨の殆んど九分の一の退化せるを見るなり又飼養せられたる鴨類の如きは羽骨の重を減すること全胛骨の十分の一にして家兎の如きは胛の重を増すと共に後肢骨の重を増加するも前肢骨の重は比較上野兎の前肢骨より輕し而して此差異を生ずるは全く急速なる運動に之を用ふること少ければなり 此三例證中鳩は不用より生ぜる機關退化の最大を示せるものなり併し乍ら深思熟考せば始めて人の鳩を飼養せし以來星霜を経ること恐くは數千に下らざる可し故に機關の全退化は最後の千年間に生ぜしものなりとするも各時代に於ける退化の度は僅少にして殆んど品目する能はざるものにして假令淘汰の行はるゝなきも猶此の如き些少の變化を生ずるものなり然して諸機關或は各部分の偶然の變化と雖も全部分の十分之一乃至六分の一の退化を來すものなり思ふて爰に至れば一時代中一生物の上を生ずる偶然の變化は其量數千年間の機關不用の結果より大なりと云ふ可し故に吾人若し諸機關使用の結果は機關不用の結果に等しとするも或は一歩を譲

りて其十百倍なりとするも各部分使用の結果は偶然の結果と比するに足らざるなり然れば生物の變化に於ては或一部分に受くるに使用が全生物に及ぼす全影響を以てするか故に該部分は淘汰の爲に充分の材料を供するに足るものなりと云ふに躊躇せざるなり故に時代を追て此變化あるときは從て淘汰愈行はるゝを以て新事情に適合するものを生ずることの速かなる用不用の結果と日を同くして論す可らず是に於て考ふれば諸機關は用不用に依て發達し或は退化するものにして且つ其性を遺傳するものなりとするも到底生物の變化及淘汰より生ずる影響の萬一たる能はざるなり

回顧せば「ラマーク」氏の世に出し當時は世人皆生物創造説を唱へし時にして一人として生物進歩の思想を腦裡に貯ふるものなかりき然るに氏獨り奮て生物進化の説を主唱し大に世人の注意を催せり其効實に高且大なりと謂つ可し然れども今「フレイクス」氏の言に徴するに「ラマーク」氏の説の如く用不用に依て生物の進化を説明せんと欲するは稍不完全の點あるを免る能はざるなり「ダルウヰン」氏も亦生物進化説の主唱者にして千辛萬苦數十年を投して身を實驗に委ね其得たる事實を基として生物進化説を主唱す故に其論據確實なること古來其比を見ず且つ其進化の方法を説明するに自然淘汰を以てし一事として之を説明する能はざるはなく古來の疑團釋然として氷解し當時胸裡に浮沈せざりし動物の体色の如きも又能く此淘汰説に依て説明し得るに至れり然れば即ち氏の論據の確實なると自然淘汰に依て生物進化の方法を説明せしとは遠く「ラマーク」氏の及ば

さる處なりと云ふも証言に非ざるなり

## 時習寮

河 原 始 二

緒言——時習寮と校風——時習寮と勉學及運動——

時習寮の自治制——時習寮の増築——結論

### 緒 言

天碧に氣爽かなる時、遠く望めは北海の怒濤澎湃空に連り蛟龍の飛舞するが如く、帆影來往隱顯して白鳥の翱翔するが如し、俯して足下を瞰めは犀川の清流滾々として東より來り滔々として西に去る、四五の長橋行人時に絶ゆることあるも潺湲たる水聲は日夜塵寰を洗滌して境自ら幽靜、巍然地を拔て聳ゆる煉瓦の高厦は間はすして是れ我辰章校、校を擁して石垣嚴めしく老松鬱鬱たるは百萬石の昔懷しき我金澤城、寶達の一峰兀として城と小立野との缺を補ひ、野の丘陵遠く東に走り嶂巒簇る所、獨り秀て、霸を稱するもの之を醫王山となす、庭前の喬松は翠蓋屋を蔽ひ、日光淡く天地清明なる夜、白山の嶽神縹渺長風に駕して臻り鏗鏘琴瑟を奏す、之を聞て嗒然自ら樂む、晴によく陰によく雨又雪、四季期を追ひ節に隨ひ眺望の絶佳なること實に金澤市内第一處とす、是れ豈に石伐山房にあらずや、予山房に寓して嘯嘯自然と語る、友あり來り訪ふ者羨慕歸ることを忘る、嗚呼予如何ぞ山房を去るに忍びむや、而かも清風漸く簷端に涼を送るの時、此の山紫水明を棄て、金澤城の畔、尾山神社の邊、學むで時に習ふ寮内の室員となる、友人予を戒め

て曰く、寮の評判由來面白からず、君何を苦むて其面白からざる所に入るや、之を止むるに如何さるなりと、予笑て答へず、將さに入らむとして寮内殆むと満員の盛大なるに驚く、依て以爲らく、彼の入寮を不可とせるもの抑寮内の事情を盡せるか、寮内に充滿する同窓は果して而かく面白からざる評判を受く可きものか、知らずして之を傳ふるならは不忠なり、誣ゆるなり、蒙るべからざる評判を蒙るならは冤なり、不幸なり、冤は雪かざる可からず、誣は正さるる可からず、と而して予は何の冀望ありてか入寮したる、時習寮一篇豈に所以なくして草せむや

### 時習寮と校風

一家に一家の家風あるか如く、一國に一國の國風あるか如く、一校にして一校の校風なきを得むや、道義を貴ふ武士の家風は其子弟をして道義を貴ふ武士たらしめたり、錙利を重むる商賈の家風は其子弟をして錙利を重むる商賈たらしめたり、其武士たらしむも商賈たらしむも唯家風之をして然らしむるのみ、一國は一家の集まる所、國風は即ち家風の成す所、一國の特秀なる國風を知らむと欲せば國民の家風を檢すべし、一校の校風を知らむと欲す、其學生の氣風に據らすして如何

### 學生心得

左の諸項を服膺して須臾も忽忘すべからず

第一項、智徳を淬礪し、身軀を健全にし、立身報國の基を建つ可きこと

第二項、校則を遵守し、師長を敬重し、學友を信愛すべきこと

第三項、廉耻を勵まし、志操を固くし、苟も浮薄の行爲あるへからさること

第四項、禮讓を重し、威儀を正しくし、苟も傲慢の舉動あるへからさること

第五項、協和輯睦を旨とし、純良なる校風を發揚すべきこと

是れ豈に生徒扣所に揭示されたる學生心得にあらずや、須臾も忽忘すへからざる學生心得にあらずや、二間大の横額、近眼者流と雖ども覩て見えざる筈なし、然れども薄暗き片隅に位置し必ずしも其下を通過する必要なければ或は恐る六百の學生、日に之を見ざる者十に八九ならむことを况むや之を讀む者をや、又况むや之を誦する者をや、又或は其是れあるを知らざる者あらざるか既に須臾も忽忘すへからずと云ふ、何ぞ明々白々の處に掲げて學生をして日に之を見せしめざる讀ましめざる、誦せしめざる。

然りと雖ども我敬愛する同窓諸君は明白なる處に掲ぐるか故に之を讀み、薄暗き處に掲ぐる故に之を讀まざる如き輕薄男子にあらずや、何となれば是れ須臾も忽忘すへからざる學生心得なればなり、若し日に之を見ず、讀まず、誦せず、而して須臾も忽忘せすと云ふ者あらば予は其の人の全能なるを羨ますむはあらず

予は此の心得を讀む毎に常に私に思へらく、第五項に所謂「純良なる校風」六字は第五項にのみ屬すべきものにあらして前四項の結語と見るべし、前四項を服膺實踐し加ふるに協和輯睦の德を以てせば「純良なる校風」自ら發揚せむ、豈に此他に「純良なる校風」なる者あつて存せむやと、故に予三省して曰く、智徳を淬礪し身軀を健全にし、立身報國の基を建つ可き趣旨に反した

ることなきか、曰く校則を遵守し、師長を敬重し、學友を信愛すべき趣旨に反したることなきか曰く廉耻を勵し、志操を固くし、苟も浮薄の行爲ある可からざる趣旨に反したることなきか、曰く禮讓を重し、威儀を正しくし、苟も傲慢の舉動あるへからざる趣旨に反したることなきかと、而して更に之を歸納して一丸となし猛省して曰く、協和輯睦を旨とし、「純良なる校風」を發揚すべき趣旨に反したることなきかと、嗚呼予や頑愚鈍昧、氣を勵まし情を制して服膺以て忽忘することなからむと欲するもの日一日にあらずと雖ども、而かも顧みて慚愧措く能はざるもの往々皆是れなり

一日慨然として考ふらく、同窓諸君は如何にして此心得を服膺し須臾も忽忘することなからむとするか、同窓諸君にして悉く此心得を以て心得となすあらば我校風は實に「純良なる校風」たるべし、然れども坊間未だ傳へて「純良なる校風」と認めざるは如何、將た現在の校風は如何なる程度に立つか、予か常に來往する學友は予か推服する所、其氣風は予之を知る、來往せざる學友に至りては予得て知ること能はず、現在の校風を知らむと欲す即ち未だ來往せざる學友に交はらざるへからず、而して其一人あらむよりは寧ろ多人同宿せるを可とす、一人は一人の氣風あり、多人同宿せば感染薰陶相互に良性を發輝し此に多人數共有の風習を生ぜむ、校風は正に其大なる者と、於此予か思考は勢時習察に及はざる可からず、時習察は同窓七十許名の同しく學び、同しく遊び、同しく食ひ、又同しく寐る所、寮生か詩歌を誦する吟聲は大小強弱の差なきにあらずと雖ども、其抑揚頓挫の調子に至りては等しく是れ一人の口に出づるものに似たり、唯吟聲のみ然



りと云はむや、一棟屋の内精神上、肉躰上萬事萬般に於て此と同一の感化作用の行はるゝは疑ふ可からざるへし。然らば本校六百の學生其數少なきにあらざれども、本校校風の起原は之を七十許名の寮生に歸すと云はむも敢て誣言にあらざる可きか時習寮生規約に曰く

寮生は第一款（前記學生心得）の趣旨を牒認して専ら其躬行實踐を旨とし以て常に左項を恪守すへし

- 一、自重、親愛、及辭讓の心情を啓培するを要す
- 二、廉耻、共同、及靜肅の美風を涵養するを要す
- 三、整理、清潔、及衛生の良風を養成するを要す

此の如く心情を啓培し、美風を涵養し、良風を養成す、是れ寮風なり、而して此三項を學生心得に比するに文字及び文字の位置を變じたるのみにして其意義に至りては更に異なる所を見ず、謂つ可し、寮風即ち校風、校風即ち寮風と、而して寮風は如何、予の傳聞する所に依れば由來稱賛するもの殆むどあるなし、然りと雖ども人の善行を稱する者は稀にして過失を指摘する者多し、嘗に之を指摘するのみならず、針小棒大一大虚を吹て萬大實を傳ふる者少しとせず、寮風の世評未だ必すしも寒心するに足らざれども而かも烟は火なくして昇らず、影は實なくして映せず、亦以て純良なる寮風と稱する能はざるなり、既に寮風にして純良なりと稱する能はず、校風の純良ならざる推して斷すへき哉、切に悲む、日本五高等學校の一に位し、日本國民の高等教育を司る

學校にして其校風の純良、世人を感化誘導するに足らず、却て非難攻撃の聲を聞くことを、而して予か心之を忍ぶ能はず、寮風即ち校風を研めむと欲して遂に入寮す、嗚呼我敬愛する寮生諸君、高潔の心、友愛の情、赤誠以て寮風を改善せむと欲する寮生諸君、願くは予をして諸君の驥尾に附せしめよ、蓋し予猥りに事を好むものにあらす

（未完）

### 莊子管見（第八號續）

春秋原 在 文

北冥有魚其名爲鯢、鯢之大不知其幾千里也化而爲鳥其名爲鵬、鵬之背不知其幾千里也怒而飛其翼若垂天之雲是鳥也海運則將徙於南冥南冥者天池也齊諧者志怪者也諧之言曰鵬之徙於南冥也水擊三千里搏扶搖而上者九萬里去以六月息者也

是れ實に莊子が開卷先づ掲げしの寓言にして、世人多くは以て荒誕不羣徒に大言を放つて天下を愚にする者となし、殊に人心の靈なる一度塵根を絶たば直に日月に逼り、其大また鯢鵬もたいならざるものあるを知らず、人若し生の自然に逆ふて之を害せず、心を率ゐて道の化するところに順はしめば、能く世俗の紛累を脱却して天鈞に休するを得べきなり、養ふてこゝに到れば心敢て外物の爲めに蕩せられず、生死利害を一にして自然の妙境に逍遙す、噫獨り大鵬を九萬里の天に翱翔せしめて、能く之を後に瞻若たらしむる能はざるもの、焉ぞ呼て眞男子と爲すに足らんや、雲氣を絶ち青天を負ひ之を天闕する者なくして、南するを圖ると、智を棄て化に乘し作爲するなくして、而も世宜に應ずると、其差果して孰若ぞや、然り而して此等の大飛躍豈に輕々に倣すを

得べけんや、杯水を坳堂の上に覆せば、芥之か舟となるも杯を置けば則ち膠す、野馬や塵埃や生物の息を以て相吹くを得ん、而も大鵬の翼や扶搖に搏て上る事九萬里、六月の息を以てするに非ざれば、南する能はざるなり、一心の解脫や利を捨てて己を抛て、一切を放下するに非ざれば、遂ぐる能はざるなり、世の賸々者流、姑息偷安唯其小に怛れて大を解せず、他の能く大を遂げんとするを見て、漫に之を謗る事をなす、蜩と鷓鴣と鵬の爲す所を笑て曰く、我決起して榆枋を捨て、時に則ち至らずして地に控つ、奚ぞ九萬里にして南するを以てせんと、世蜩たり鷓鴣たるもの頗る多し、莊子其の徒を論て曰く

適莽蒼者三餐而反腹猶果然適百里者宿舂糧適十里者三月聚糧之二蟲又何知

信なる哉言、朝菌は晦朔を知らず蟪蛄は春秋を知らず、彼等奚ぞ世に冥靈大椿の壽あるを信する事を得んや、小の大を知る能はざる固より其變なり、二蟲の笑何ぞ大鵬に於て之を病まんや、今夫の知、一官に効し行、一郷に比し徳、一君に合して一國に徴あるもの、敢て自ら高しとして、傲然至人の測るべからざるを謗る、何ぞ一に斥鴳の蓬蒿の間に翺翔して、自ら巧なりとする輩に似たるの甚たしき、於戯滔々たる天下、宋榮子の爲めに猶然として笑はれざるもの夫れ幾許ぞ、彼宋榮子の如き、世を擧て之を譽むるも勸む事を加へず、世を擧て之を非るも沮む事を加へざるものなり、彼實に内外の分を定め榮辱の意を辯ず、焉ぞ促々として名の爲めに心を役すること爲さんや、然れども彼未だ物外に超然として利害の念を離るゝ能はず、尙眞に達せざるものあり列子は風に御して行く、冷然として善く旬有五日にして反る、彼既に是非利害の見を脱して、又

福を致すに數々然たらず、而も尙待つ所ありて未だ達せず、若し夫れ生死を一にし人我の分別を破るの士は、直に之れ天地の正に乗じ、六氣の辨に御し以て無窮に遊ふもの、彼且た惡んか待つ所あらんや、莊子六卷その神髓を擧ぐれば一語にして足れり、曰く

至人無己神人無功聖人無名

噫唯名を外にせば即ち聖人なり、功を外にせば即ち神人なり、能く己を外にせば即ち至人なり、扶搖に搏て九萬里の天に上るもの、豈に獨り鰥の化して鵬となりしものに止まらんや、苟も能く摩訶の大鈞を振て是非人我の塵根を截斷せば、天下は悉く鵬となつて無窮に逍遙する事を得ん、都この靈妙の心を蓬塞して、罣礙なきの天に飛はしむる能はず、垂天の雲水に撃つ事三千里なる大翼を有して、空しく榆枋蓬蒿の間に翺翔し、鷓鴣斥鴳と其の跡を同じくす、天下民衆の愚あに亦言ふに堪んや

夫れ鷓鴣深林に巢ふも一枝に過ぎず、偃鼠河に飲むも滿腹に過ぎず、今人營々として心力を勞し以てその名を得ん事を謀る、而も酬ゆる所果して何物ぞ、名は實の實なり、男子焉ぞ實の爲めに其身を喪ふ事をなさんや、故に許由堯の禪を却けて其眞を全くせり、聖人の名無き即ち之なり、且つ是非利害の見を離れ天鈞に休するものは、其徳最も大なるもの、是れその塵垢秕糠も猶將に堯舜を陶鑄するもの、徳萬物を磅礴して自ら天下を化するもの、孰ぞ弊々焉として物を以て事と爲さんや、故に藐姑射の神は靈氣に乘し飛龍に御して四海の外に遊ぶ、而も其神凝て物をして疵癘せしめずして年穀を熟せしむ、福人の功なき即ち之なり、然り而して能く道に究極せば、胸中

一切の所有を空ふして無物の始に遊ぶ、故に堯の四子を藐姑射の山に見る、汾水の陽竇然としてその天下を喪へり、至人の己無き即ち之なり、嗟々大なる哉道之用、修めてこゝに至れば心敢て外物の爲めに害せられず、大浸天に誓るも爲めに溺れず、大旱金石を流し土山を焦くも、爲めに熱せられざるもの、何ぞ一に壯なる、之を以て彼の色を見れば色に執し、聲を聞けば聲に執し、心を率ゐて六識の奴となし、霹靂僅に轟けば膽則ち破れ、激浪少しく舉かれば氣則ち挫かるの輩に比すれば、其差豈に霄壤を以て盡くすべきならんや、噫、嗚呼芒昧を以て空しく一世を終り、蠢爾として五尺醜骸の役する所を免れざるもの、焉ぞ天地に通じて三才と呼はるゝの徳あらんや起よ起よ、速に蹶起して區々たる小智見を脱却し、自然の妙境に逍遙すべきなり、醉生夢死豈に丈夫の得て爲すべきものならんや、

都、人その我見偏執を脱却して自然の化に乗せば、我は則ち天地にして天地は則ち我なり、争ふべき物もなく役せらるゝの形もなし、唯虚静恬澹寂寞無爲なるのみ、然りと雖ともこゝに稱して虚静恬澹寂寞無爲と云ふもの、豈に夫れ槁木死灰の謂ならんや、唯心自然の妙用に合し作爲するなくして、而も天下の故に通すべきを云ふのみ、世の聒々者流自ら其智を蓬塞して達する能はず聒々誘て曰く、其事恢弘と雖とも機務に功なしと、噫不龜手の藥を以て一生併澣統を免れざる者其罪果して孰にか存す、唯夫れ之を用ゆる拙なるに依るのみ、夫の惠子亦鳩と鵲との徒與なり、事鯤鵬の外を測りて自ら得たりとす、今惠子莊子に問ふの一節を擧げて、盲を以て漫りに無用を訾毀する輩の妄を自省せしめんとす

惠子謂莊子曰吾有大樹人謂之樗其大本擁腫而不中繩墨其小枝卷曲而不中規矩立之塗匠者不顧今子之言大而無用衆所同去也莊子曰子獨不見狸狌乎卑身而伏以候敖者東西跳梁不避高下中於機辟死於罔罟今夫斲牛其大若垂天之雲此能爲大矣而不能執鼠今子有大樹患其無用何不樹之於無何有之鄉廣莫之野彷徨乎無爲其側逍遙乎寢臥其下不夭斤斧物無害者無所可用安所困苦哉妙は不言にあり妙は不言にあり、唯心眼を開て之を看取せよ、其味津津として蓋し竭きざるものあらん

(本論終)

## 文 苑

## 對雨思梅花

木 か く れ 生

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。と云ひけるもげにさることになん。風のさそふに花をあはれみ月に對ひて雲を厭へばこそ。惜みしてふ心も一きは深きなれ。いつも盛に隈なきのみは。いかで思のますべきやは。されば梅を見るも雪霜にこゝえ雨風にそぼちて。千種の花にさきがけて。春を知るぞはへある。盛久しとて櫻の花にまつはりあて。何にの愛つへき所かあらん。とく咲きてとく散るぞこの花のあはれに尊とき節なりける。まかはあれどやうく咲き出でたる此の頃。人の心も花鳥の色音に匂ふ木のもとにのみ。あくがるゝを。昨日けふ晴れ間なく降り暮らす春雨に。わりなくたれこめてお簾の外に移り行く花をあもふも。いと心もとなきに。風さへ

たち添ひねれば。宿り知らばや行きても恨みんと歎かるゝも。晴れての後のみ空に残るは。たい萎める花にありし句の名残ばかりならんと思亂るゝに。さては百くさゝに魁けしこの花の心知りてや。知らずでや。』

### 寄落花

蓬生庵

今年より春知りそむる櫻花散るといふとは習はざらん」などたのみし木々の咲きしより、菅の根のなかり日も。おぼえずながめ暮らせど。なほ飽かぬ恨をのこして。靜心なく散りそむるは。實に敢果なくかつは心もあはたしき限になんありける。晨の雨にほころびそめ。夕べの風の吹き送る花の香の。身に浸むばかりうれしかりしは。夢と過ぎ行く此の頃の心盡しよ。さはれ咲く花の散らでしとまるものならむには。何をかおもひなやまむ。咲くを待ち散るを惜むも皆人の一花ごゝろ。如何で頼まるべき。果ての憂きよを見はてぬをこそ。花の心とはいふ可けれ。敷島のやまと心の一さかりなこりも清く散る櫻かな』

### 醍醐天皇

脇田琥一

寒き夜の御衣はよしや輕くとも重きは君のめくみなりけり

### 源賴政

大宮のまかをうちてし君なから咲かてちりぬる埋木のはな

### 越中國雨はらしにて源義經を

雨をたにまのきし君のいかにして重き濡衣うちかさねけん

### 社頭花

香有茂富

千木高くかゝれる雲は御社のみ山にさけるさくらなりけり

### 池杜若

春風にあやあるなみのうねゝをいろどるいけの杜若かな

### 母君のみまかり給ひける時

恒田勝治

ことわりの別れなからも萬代といのりしものを今は悲しき

### 櫻花歌

福井喜彦

百八十の國にまされる國そとは櫻を見ても知るへかりけり

春秋のはなのことゝ見つれども櫻にまसार花なかりけり

### 述懷

事あらむ日をし思へば焼太刀も心とともにとくへかりけり

### 篠原なる實盛公の墓を尋ねて

戸村義保

露しけき野ちの篠原わけ行けはむかしかたらふ松かせの聲

### 朝霞

朝日子の影まつみねは晴れそめて麓になひく春かすみかな



山曉落花

走らみ行く峰のあらしも色見えて花の雪散る木かくれの宿

春季雜咏

眼を射て鞭流れけり春の川　　修竹  
大佛は花の梢に坐したまふ  
大川の船に灯ともす櫻かな  
かすみ行く松の梢の白帆哉  
人去つて渡頭灯起る春の夕  
行春や社のむねに鳩が鳴く  
藁家の二軒並びて桃の花  
霞む日の武藏下總山もなし  
蠟燭に鼠つきけり雛の棚  
哀悼  
狂女其名を陽炎と呼にけり  
春風や柳の下　　石佛　　球江  
夕焼やほろ　　と鳴く雛子

ちら　　と雜木の中の櫻哉  
鶯の背戸にきて飲む手水鉢　　垂東  
土筆四五本崖にほうけり  
途のべに堇摘みをする女かな

四時佳興亭記

村山　函峯

神木氏。新築亭於墨水西岸。土木之美。與此境適焉。主人請余名之。余思之未得也。一日訪翠園橋本公。偶見四時佳興四大字。乃梨堂相公所書也。余不覺拍掌曰。斯可以名彼亭矣。因談之。且稱其所收四時之勝。曰。賞花於春。則櫻雲十里。掩映長流。納涼於夏。則綠樹一望。心目爽快。秋則奇於月。冬則宜於雪。公曰。余安得一寓目。遂導公登其亭。時方首夏。蘆葦抽青。江面疊綠。公執盞顧余曰。美哉勝也。子所稱果不虛矣。余請名之。公笑曰。何須吾名。嚮所示梨堂公書。如爲北亭者。請贈之。明日余拜受而去。乃寄之神木氏。主人喜出意外。請記其事。余謂四時佳興。蓋取諸朱文公四時佳興與人同句也。夫天下之美。莫先於與人同焉。而鄙夫一紙一錢。不能與人。况於其所愛乎。四時風月之勝。天下之人。目同見而心同愛之。鄙夫卒不得私之。然巨宅大廈。占據勝地。而不能延一客同之賞。亦非私天下之所同愛者乎。主人愛客。而同其所愛。可謂達矣。公亦割其所愛。而與之。與客一紙一錢者。適別。皆能合文公之意者也。余安得不記以傳之。主人拜

曰。然。遂爲三之記。

## 蓬萊遊囊

引

香 陽 生

香陽子夙抱一世之狂骨慨然辭故國之山河一上人生之征途以來南船北馬孤身恰從斷蓬歲華匆匆既幾閱去歲霜辰濺方斛之恨淚于舊都之風月復轉客于北陸北陸之風物頗不同於江南而其節漸屬元冥也朔風悲號六花亂飛終月杜門沈吟所作寒灯孤枕所聚浩感群愁心目慘不開夢寐悽悽驚中夜蹴衾而起危坐而痛傷咄咄遊于江湖天涯所慮者何事思身憶人懷家想國洵湧世波淘來新陳愚我狂依舊頑漫決皆于大荒之外愁東西文物之荒莽翻牽心于塵界之間傷人情之峻嶮此感此慨結而不能自解歲之春三山殘雪尙深而惠風既遍越國和氣遲日稍可以舒悲客之愁眉此際偶得學閑乃閒適逸優欲遣幽悶于能州之山水三月下旬孤館飄然鬢髮鬢鬢發金城自所謂外浦路而進經羽昨富來輪島過大谷吊平大納言之墓回珠洲崎觀源九郎之遺笛于須須神祠出于飯田沿所謂內浦路探諸勝區又時叩詞朋之門遙下自冲波而舟渡于能登島投友人家零尋島中之勝概再渡于和衾終自七尾而南歸金澤矣能之山水風光秀靈而人情醇古風俗粗朴皞熙悠逸夙有蓬萊之目者若使此遊尙充分飽烟霞之仙氣加以放翁山陽之筆乎則明治之昭代有亦添一大光榮也必矣惜筆墨乾枯僅霑之以感慨之熱淚其汚仙靈之好風致有深自羞也抑能州百里之環回以其爲外浦路其爲內浦路自異其山水之風趣延見其人俗物質稍不相同要之外浦路則良港尤乏人口亦不甚蕃而其天然之風色頗壯大跌宕若彼

福浦外浦第一之景波濤万頃淘去淘來嶺山腰之處一俯千巖削成截斷巖穴洞門裝之以稚松翠蓋蒼碧欲滴斷雲浪花飛帆浴鴈縹緲如畫頗足洗滌人胸襟矣總持寺在門前村曹洞宗本山佛閣經樓連綿相臨輪奐之齊整雖京洛所亦罕見境內之十景亦可賞特其四圍山巒之幽邃村落之閑靜使多愁之過客轉覺滯留參禪之情矣輪島觀音山眺望空濶七點青螺敬在于水天一髮之上呼欲應飛路磯之嶮勝於越中親不知之嶮云亂峰羣巒馳入海怒濤驚浪來吞之峭崖千丈如削其側僅通荒徑人則添躄岩壁而漸過之近來鑿隧道于其最嶮處得以免危難而飛沫紛然往往濕人衣冬日風暴則全斷人行云可以見其絕嶮而今以此比塵寰人情之至危至嶮尙未以爲嶮嗟吁飄零孤客迨今抵此誰不仰天愴然爲長太息乎哉大谷山中平時忠之墓墳綠樹青苔空剩累代之斷碣耳飛花啼鳥春山寂寞回首歲華七百可憐之雲客呼不應嗚呼我既途尋源九郎脫走之遺趾于關鼻來又吊平家之末路于此海角地隅追懷往事俯仰乾坤豈堪嗚咽涕淚之情哉偶叩一山家得其後裔者宅狹屋粗何有當時之盛觀榮枯盛衰真如一夜春夢况幾物移星換經桑滄之變乎嗚呼逝者既不可追哭之憾之其何及矣而室有老嫗能話古幼女春尙殘而容姿如花風神似仙正是深山未綻之櫻空谷未琢之玉舉止不輕而高潔言辭不華而清明疑是仙靈之謫女乎不然是知非當年平家少無官者之香綢玉織姬之再生乎若其然而彼則既遠消于須磨浦外一夕愁烟已矣此則亦欲空散于大谷山裏三春之慘雨矣相逢異時而落寞同境况茫茫浮世才子泣窮途佳人歎薄命而世網紛牽天緣忽摧聚散無定是無不自古而皆然思之想之傷哉悲哉人生之孤寂累累乎其殆將無處歸適矣吁嗟噫高屋一漁村巖巖突兀擁全浦勢阻滄海氣象極豪壯也就中抱巖日和巖者爲最絕特偉觀外浦風景之特性於此乎可得最能看之矣上浪烟燈臺北方遙眺鸚鵡羅天

憂經國劃策未成山伏山頭對佐渡島於海烟漠々之間吊承久帝子之英魂又懷孝子阿新丸之古事亦激遊子之悲懷峭島辨天島美則美惜觀之不大耳飯田之佛石銀石皆珍奇柳田梅花正半開迎遠客爲有所聊開心顏兩崖青巒松杉茅屋相參差梅花點綴之如凝雲斷霞豁底極蒼遼犬鷄之聲遙在雪花雲樹之裏願望能海滄波洗蕩眼界濶然蓋能州之羅浮乎又月瀨乎恍然如造異境只憾境域狹窄梅樹少矣竊飼往還寺雲濤上人有風流瀟散之致韻留予誘伴携酒遊于端崎賞觀吟哦行中之快無過此越山之峯雪見月島之落鷺今尙髣髴在眼中况是岐山詞宗曾遊之處乎深謝上人戀路一幅佳景灣外小嶼亭松數株翠影映白波到此使人頗感所謂內浦路山水之特色在蒼翠雅典之致松岡寺別莊隱逸靜寂可愛抵逢坂看九十九灣峭壁曲々如列屏而其質皆黃土稚松微蔽此與灣水相掩映彩鱗游泳灣中蓬萊島桂樹鬱茂全景有見唐畫之感未至如世間傳唱而亦難得佳境也田浦辨天祠島聳坐于中央左右之翠嵐青黛如修眉清影落水面恰似美人對鏡治雲鬟浦口帆影遠出沒如白鳥比之九十九灣甚狹而其山骨深藏而不露漁船不到絕遠風塵優雅秀麗楚楚偏覺可掬蓋能州第一之美景也嗚呼於人誰忘大谷之山中於天然我實不得不取田浦之翠色矣能登島中一夜之泊亦可以知別乾坤人俗之質素醇朴錦木氏之好意多謝多謝若吉川氏滿眼鏤探掘資益博物學者之研究稱蝦夷而有裾村者人類學者須一行見之來和倉驚其光景之平平凡凡彼嘖々乎人口者其由何而然乎所謂屏風岩者不過無趣赭山耳不知美神果宿何邊乎且象客沓聚俗氣紛紛加之人情稍流輕佻風俗亦傾猥醜志士當催嘔吐也攀一小坂望田鶴濱水寺倚山茅屋成村青松連濱水田渺瀰寧可大喜矣妙觀院據孤巒之一小梵宮耳而眺觀頗疎濶遠近山水平落入小欄只寺僧之輕浮可憐七尾街無予之說而則可矣總之環回百里之

道途頗不堪夷或迂回山脚沙頭之亂逕而鮮魚夥上撰純酒快買醉而其人情之質實所往無辭一泊者其親切歉慙當世所謂文明之士遊此豈保無亦爲慙殺哉於戲樂哉蓬萊之游也洋洋兮悠悠遠毀譽忘榮辱不知得失豈要馳利逐名咎人傷己憂國歎世之煩乎哉然而人生必竟多牽累塵世漠々雜情相拘相繫其奈不許長留滯于仙寢眠於巖穴荊烟霞以隨意之所適繫我生于無窮何其終歸金城時滿城春色正闌尾山祠頭兼六園裏櫻花桃李相爭開發燎亂城裏人土無上無下群肩相摩醉酒吟歌爲萬丈紅塵香陽子飄然落來此雜塵間身似謫仙茫然自失無伴無朋對爛熳之盛春氣鬱情阻中心怏怏厭世忌人終不能自持回首蓬萊山河道路迢々雲端佳人恍如夢花影連亂殘月在梁悲曾逢之莫回而愴離合之無常伏而思之人情嶮絕無可倚無可賴仰而歎之彼蒼浩茫不可語不可訴其不如寧解褐香然入山谷乎將又剪髮明朝弄扁舟乎吁噫無盡之感慨有誰乎泥焉沈痛抑鬱心嘔肝吐悲鳴悵然爰擲筆

## 臨游有作

人生在世不堪愁。枉試蓬萊百里遊。海角青山披畫幅。桃花流水逐仙舟。古今通塞情多背。天地吟哦樂未休。昨夜春風深越路。夢魂先我落能州。

## 湖上

世塵才脫到湖頭。風雨旋驚征路悠。漠漠春寒吹客袂。蒼蒼愁霧鎖孤舟。丹心傷心知何補。綠鬢臨風暗自羞。到底寄身何處是。試將心事質沙鷗。

## 過末森山下

末森山勢太嵒嶢。天半棲鴉簇樹梢。懷古英雄渾宿莽。惟今城跡付山樵。野田呼雨鳴蛙急。荒驛迎

人匹馬遙。正是梅花零落盡。能州三月路蕭蕭。

眉影山

夜來輕雨洗嬌姿。青黛新粧分外奇。正好菱湖揩鏡面。春波一碧蘸修眉。

妙成寺

畫裏妙成寺。分明雲樹裝。松濤響烟浦。塔影倒空洋。老衲入禪寂。頻伽鳴法堂。空欄去來影。天際白帆翔。

福浦

登高俯龍窟。脚下鬱千巖。松蓋含斜日。浪花來片帆。風烟披畫幅。嵐翠濕青衫。莫漫題詩句。勝區元不凡。

門前二首

日暮將何適。來投古寺前。入門春月靜。穿樹夜泉懸。風鐸定巖巔。紹興和尙定禪巖、有松樹茂生、呼爲疎定巖風鐸、居于總持寺十景之一

燈墟黑烟。征途我疲矣。信宿結香緣。春月朦朧古寺前。四圍林嶂淡於煙。興來中夜沿谿步。犬吠山村花樹邊。

飛路磯

斷崖飛路掛。孤客側身來。怒浪淘岩激。雄峯逼海頽。眉間過落鵲。鞋衣殷晴雷。不似世途嶮。五丁容易開。

雲濤上人伴予游端崎岐山先生曾有詩因次其韻似上人二首

先生登眺處。偶此對斜暉。臨海亭欄兀。藏蛟洞穴微。暮雲迷越嶽。春汐捲端崎。覓句耻才拙。空看帆影歸。

一幅越能景。蒼茫將落暉。橫空峰雪紫。壓巖嶼烟微。鷺落明岩樹。帆回掠海崎。蓬萊忘日月。遙客未知歸。

泊能登島錦木氏

勃勃詩情遇境牽。欲歸仙島又停船。環回卅里桃花浪。夜載吟魂追謫仙。  
(未完)

次阪本三橋病中作韻

蓉湖漁史

三橋名劍之助。爲岡山縣書記官。今養病於明石狎鷗閣。

山水明仍媚。回頭思昔遊。句因景佳巧。病爲興閒瘳。松護歌仙廟。霧籠詩客舟。倚欄鷗可狎。江閣信堪留。

養病還不俗。來寓錦江灣。漁火輝幽渚。篆烟繞博山。翻々詩思湧。灑々宦情閒。灑藻樊川似。才名徧世間。明石一名錦江

門脇鑿甫在文科大學。一日讀書。有鶯入窓。止而不去。因養焉。賦之以贈。

蒼鷹爰止事何奇。我武維揚祥可知。今見書窓鶯婉轉。期君文陣作雄師。

偶成二首

松心子

金城十萬日曠々。初見東風北陸墮。二月長江搖舊綠。一園過雨駐新痕。笑看草色多生意。坐想烟



光懶出門。咄々春遊貴公子。黃金妄擬箇中尊。  
到底難料造化工。還教佳氣四方充。多情芳草招遊子。得意梅花驅暖風。柳際晴檐看漸動。畫中春色合皆同。杖頭高挂青銅百。我亦徜徉野水東。

## 書齋漫興

思脫塵埃詩始奇。志存經世不求知。達觀今古書千卷。翻倒乾坤筆一枝。春色堪憐花發候。秋容可愛月明時。此人未必棲姑射。風御冷然隨意宜。

## 謝人贈梅花

縞袂仙人身似鐵。嫣然帶笑忽來過。相看襟抱若冰雪。爲向廣寒呼玉娥。任是目成初不語。如馨我喜本非他。詩成自道無烟火。問訊知君果謂何。

## 春期即事

冷骨

朝日輝々斜射紗。驟聞庭樹鳥聲譁。前宵過雨是非夢。落盡枝頭多少花。

## 散策即事

金城兒女踏奇歌。聞遍南岡又北坡。雲卷奔潮能海遠。天晴殘雪越山多。野橋影動盈々水。暖日烟浮細々莎。歸也忽々裁尺素。故園風景問如何。

## 春夕聞鶯

點々歸鴉集暮林。可憐黃鳥獨何心。流連花樹親明月。吸飲清香弄好音。韻學幽簧喉正滑。影如淡墨地堪尋。數聲鳴止春天寂。遊子吟魂入甚深。

## 雜錄

## もだまの説

K. O. 生

もだまは古より知られたるものにして、海岸に漂流し海藻の中に混じたる圓きものなるより、誤て藻の實となし、藻玉の名を付したり、此者甚だ硬くして、黒き光澤あるにより、之を器物に造り、根付などにしたること、猶くるみに彫刻して、腰下げ物の根付にしたるが如し、先年當校工科二年生小西氏より此植物の實を寄付せられたるに依り、諸書に據りて其產地形狀等を知るを得たれば、茲に此が記を作りて、廣く諸子に報じ、一は以て氏の好意に報いんとす、

此標品は氏の大人が薩摩に旅行したる際、同所にて獲たるもの、由にて、氏の話によれば、斷崖より懸垂する蔓に生ずといふ、然れども、書に據るに、此者和産なしとあり、故に氏の話と符合せざる所あれども、暫く氏の話を信じて、他日の考證を俟つ、

本草綱目、啓蒙蔓草の部卷の十四五丁に、榼藤子一名藤榼子又猪腰子として記して曰く、「和産ナシ此子古ハ紅毛ヨリ來ル、今ハ然ラズ、蠻國ヨリ四邊ノ國海濱ヘ漂流シ來ル、故ニ佐州若州紀州但州土州薩州筑前等ノ國其他諸州ニアリ、皆海藻中ニ混ズ、故ニ拾ヒ得ル者アレバ、誤リ認メテ藻實トス、因テモダマノ名アリ或ハ蠻語ナリヒ云、其子形圓扁大サ或ハ一寸厚サ三分許、或ハ二寸厚サ四分許、大小常ナラズ、栗殼色、或ハ赤ヲ帶ビ、或ハ黒ヲ帶ブ、其肌ヘ或ハ糙澁或ハ光

滑其一頭ヲ横ニ切り、内ノ肉ヲ去テ藥瓢トシ藥ヲ入ル、ソノ皮甚ダ厚硬、故ニ藥ヲ貯ヘシ、コノ實全キ者ハ外ニ大莢アリ、濶サ三寸許、長サ二尺餘故ニ角如弓袋ト云、子中ノ肉色白シ、鮮ナル者ハ、夏月地ニ下シテ生シ易シ其藤線稜アリテ絲瓜藤ノ如シ、葉ハ木通葉ニ似テ左右各二ツ四葉一蒂ニシテ、末ニ二鬚アリテ、モノニ纏フ、年久シクナレバ、左右各四ニシテ、八葉一蒂トナル、其一葉ヲ離セバ、形長ク尖リテ、南天燭葉ノ如シ、光澤アリ蔓ト共ニ深綠色、甚ダ寒ヲ恐ル、釋名槁ハ酒器ナリト註シテタンポノコナリ、又サゲヂウノコモ槁ト云フ、中山傳信錄ニ圖アリ、此レト別ナリ、

とあり其形狀は、之にて充分詳にするとを得べし、今小西氏の標品は、唯莢のみにして、葉莖は存せざれば、知るに由なけれども、莢は甚だ長大にして、長さ二尺二寸餘、巾三寸に達し、横に數節に隔離し、各室に一個の種子を藏す、故に此果實は植物學上に節莢 (Juncus) と稱する類にして、膜甚だ鞏固にして、恰も皮の如く、黃褐色をなせり、種子の大きさは、前記啓蒙に詳なる如く、少しく心臟形をなし尖ならず、之又甚だ硬し、其堅牢なるに依り、海水に漂ひて、腐朽せざると、猶椰子樹の實の海に流れて、分布する一般なり、

此植物は荳科に屬する植物にして、學名を *Entada Scandens* Benth. と云ふ近頃再版したる植物名彙には *Puseiha Scandens* (L.) O. Ktze の名を挙げ未だ本邦に移植せざる由を記せり、

Lindley and noorés Treasury of Botany に此の屬の事を記したれば、茲に譯出す「*Entada*」屬は豈科植物ノ一屬ニシテ凡ツ十二種ノ上昇莖ヲ有スル熱帶產ノ灌木類ヲ含ム、葉ハ再羽狀葉ニシテ、

花ハ葉ノ基部ニ穗狀ニ生シ、若クハ枝ノ頂端ニ總狀ヲナシ、鐘狀ノ萼ヲ有シ、五片ノ白色、又ハ黃色ノ瓣及ビ十雄蕊ヲ有ス此屬ノ最モ著明ナル性質ハ其莢ノ甚シク長キコトニシテ、莢ハ扁ク木質ニシテ數多ノ節ニ分レ各室ニ一個ノ大ナル扁キ滑ナル種子ヲ藏ス *Entada scandens* (即ちだま) ハ兩半球ノ熱帶地ノ產ニシテ、莢ハ往々六乃至八呎ニ達ス、種子ハ凡ソ二吋ノ徑ヲ有シ、半吋厚ク硬ク木質ニシテ、美麗ニ光澤アル殼ヲ存シ、暗褐色若クハ紫色ヲ呈ス、熱帶地方ニテ、土人ハ種子ヲ嗅烟草入香入七等ニ用ヰ、印度ノ市場ニテハ錘トス、當國ニモ折々輸送セラル、ニアリテ、ロンドン市中ヲ *West Indian Filibets* トテ賣歩行クニアリ、然レモ、食品ニアラズ、時アリテ海流ノ爲ニスコットランドノ西海岸、及ビオートクチー地方ニ來ルニアリ、又ロホデン島及ビノーウエーノ海岸迄モ達スルニアリ、

されば此植物は其分布廣くして、啻に支那地方のみに限らざるものゝ如し、然れども、本邦に來るものは、薩南諸島支那地方のものなると明かなり、今左に植物名實圖考の文を引て、其支那の產地等を示す、同書卷二十蔓草の部九丁に、

槁藤子、即象豆、詳ニ南方草木狀、本草拾遺、開寶本草、始著錄、南越筆記云、子炒食、味佳、雲曩農曰、余至<sup>モッ</sup>（今ノ福州）未<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>斯藤、按<sup>レ</sup>記子可<sup>レ</sup>食、膚可<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>槁以貯藥、何造物憫<sup>レ</sup>斯人之勞而爲之代斲也、鹹之實有<sup>レ</sup>匏焉、小以酌大以濟、木之實有<sup>レ</sup>椰焉、小以飲、大以掬、古者祭祀器用<sup>レ</sup>匏、非<sup>レ</sup>僅尙<sup>レ</sup>其實、亦以見<sup>レ</sup>天地之爲<sup>レ</sup>人計者、纖悉俱備、用之以示<sup>レ</sup>報也、彼靡<sup>レ</sup>天地之物、而不<sup>レ</sup>知天地之心、必以暴殄致<sup>レ</sup>天罰、槁藤惜<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>植<sup>レ</sup>於嶺北<sup>（嶺ハ五嶺トテ福州ヨリ）</sup>近世蜀中<sup>（楊子江ノ上流ノ邊）</sup>摸<sup>レ</sup>柚

皮以無用爲用且輕而潔、南嶽（衡山ニシテ楊子江ト五嶺トノ間ニアル支那南方ノ大山）斷大竹以爲甑、至省工力若而人也、以骨巧也、不爲病矣、

「長編」嘉祐本草、楨藤子、味澁、甘平無毒、主蠱毒、五痔、喉痺及小兒脫肛、血痢並燒灰服、瀉血、宜取一枚、以刀剗內瓢、熬研爲散、空腹熱酒調二錢、不過三服、必效、又宜入澡定、善除黥黥、其殼用貯丹藥、經載不壞、按廣州記云、生廣南（廣東ノ南ノ部地方）山林間、樹如通草藤也、三年方始熟、紫黑色、一名象豆、南方草木狀同、

本草衍義、楨藤子、紫黑色、微光、大一二寸、圓扁、治五痔有功、燒成黑灰微存性、米飯調服、人多剔去肉、作藥瓢、垂腰間、

南越筆記、楨藤、其莢有白子數枚、殼扁、狀如楨、子水浸數日、炒食之、味佳、

本草拾遺、象豆、甘平無毒、主五野雞病、蠱毒、飛尸、喉痺、取子中仁、碎爲粉、微熬、水服一二七、亦和大豆、燥面、去黥、生嶺南山林、作藤著樹、如通草藤三年一熟、角如弓袋、子若雞卵、皮紫色、剖中仁用之、一名楨子、一名合子、主野雞病爲上、

同書に形狀を掲げたれども、粗にして、考證に資するに足らず、此頃近藤茂一氏の話に、能州高濱にて、或人の此實を拾ひたるとある由を語れり、啓蒙に既に若州但州に獲たるとあるを記せば、敢て異とするに足らざれども、筆の序に記すと然り、

# 太古希臘物語集

浦井恒堂

## （一）カドムス（Cadmus）の話

此人の重なる事蹟はセピス市の建設なり希臘人の傳ふる所次の如し  
 フロニシア王アゲノール（Agenor）はチエウス神の爲めに愛娘ヘイローバ（Europa）を奪ひ去られければ悲歎の涙にくれけるが終に忍ぶ能はず其子カドムスに命じて其行先を搜索せしめむとし其發するに臨みて之を戒めて曰く事成りて愛姉を携へ歸るにあらざるよりは復吾を見るを許さじとカドムスは命を奉じて數年間諸方を廻りけるが毫も其効を見ずされども父の嚴命背き難ければ頗る困却しデルヒ府に赴きアポロ神の教を請ひぬ神巫之に告げて曰く汝の冀望は到底成効の望なし宜しく之を止めて新しき事實をなすべし神は汝に新都府を建てむことを命じ給ふ汝此堂を辭せるの後衡を着さる小牝牛を見む其臥す所は即ち神が新に都府を建てむと望み給ふ地と知る可しとカドムスは神告を奉じて堂を辭し行くこと暫時にして果して小牝牛を見き乃ち神告の靈驗あるを感佩しつゝ其跡を慕ひ行きしに小牝牛は天を仰き靜に長草の裡に身を横へにきカドムスは此牛を犧牲にして神を祀らむと欲し從者に命じ林中に赴きて水を求めしめたり然るに此林中の靈泉はアレス神に供へたる者にして一匹の靈龍ありて之を護り居しかばカドムスの從者の接近し來るや直に躍りかゝりて之を噛殺したりき

カドムス之を知らず待つこと多時なりしも從者終に歸らざりしかば其變ありしを思ひ手鎗と投鎗とを提けて馳て林中に至りしに是は如何に彼の從僕は血に塗りて地に伏し其傍には見るも恐しき

怪獸牙を鳴らして屹立せり從僕の仇御座んなれど大岩をとりて擲ちしに怪獸の皮堅きこと鐵の如く毫も痛痒を感じざるか如し乃ち投鎗を投せしに此度は怪獸の脇腹を貫けり怪獸は此深手に怒り猛りカドムスを目懸けて飛びかゝりしかば直に身を轉して之を避け手鎗を以て奮闘し終に之を斃せり

此時空に美妙の樂起りてバラスアテテ神出現し玉ひカドムスに命じて怪獸の牙をとりて之を地上に播かしめ玉へり然るに此牙は變じて數多の戰士となりカドムスの面前に於て激烈なる争闘を始め其過半は斃れて僅に五人生存せり而して此等は互に和しカドムスを仰きて其君となし力を協せて有名なる齊武市を建設したりきされば後世齊武の貴族は皆此際地中より涌き出たる戰士の後裔なることを主張す

アイレス神はカドムスカ己の良僕を殺せるを憤り將に之を殺さむとせりチエウス神は之を制しカドムスをして其罪を償はんがため八年間を期しアイレス神の臣僕たらしめ給へり其期終るやアイレス神は痛くカドムスの忠良を嘉し其罪を赦せるの證として愛娘ハルモニヤ(Harmonia)を與へ給ひぬ希臘の天神地祇は盡く來會して喜を述べ物を贈れりと云カドムスは妻と共に齊式に都し富み榮えたり其子男子一人女子四人後孫ベンテュス亂を起し王位を篡ふカドムスは妻と共にイリヤに隠れしが死後兩人共にチエウス神の爲めに蛇に化せられ續きてエリシウム(Elysium)に移されたりといふ

## (二) ぺるせうす(Perseus)の話

此人はチエウス神とアルゴス國王アクリシユス(Acrisius)の娘ダチエ(Danae)との子なり始め神巫ありアクリシユス王に告げて曰く汝の娘ダチエの産める子は必ず汝の命を奪ふべしとアクリシユス深く恐れ銅を以て一の塔を造り娘ダチエを其裡に幽囚し嚴に外人との交通を斷ち以て其禍を避けむとせり其用意も効なくチエウス神は身を黄金の雨に化して塔内に忍び入りダチエ嬢と會し終にヘルセウスを産めり

アクリシユス之を悟らず揚々自得し居たるが一夜塔外を過ぎしに嬰兒の泣聲を聞き氣絶せむばかりに驚きつ己の苦心の水泡に歸せるを憤りダチエと嬰兒とを箱に盛り之を海中に投じけり然るにチエウス神は海神ポサイドン(Poseidon)に命じて波浪を静め安全にセリフス(Seriphus)島に送らしめたり其島の王ポリデクテス(Polydectes)の弟デクチス(Dictys)會ま海邊に出獵しつゝありしかば母子の急を救ひ携へ歸りて國王に謁せしめたりき

國王ポリデクテスはダチエの美を喜び之を納れて后となしヘルセウスを子養せり長するに及び力量才學衆人に秀しかばポリデクテスは愛寵措かず此兒をして驚天動地の大偉業を爲さしめむとを冀ひ種々思案に凝りたる後ゴルゴン、メヅサ(Gorgon Medusa)を殺さば其名天下に轟くべきを思ひ切りに愛兒をして此事業を爲さしめむとせり而して此目的を達せむには翼ある鞋一足神靈なる佩囊とアイデスの甲との三を要すアイデスの甲とは之を戴く人目に觸れざる奇特あり然るに此三者はニンフスの所有品にして此者の住居を知れるは獨りグレエ(Graee)人のみヘルセウスは先づ此者を求むとしてヘルメス及びバラスアテテを案内者として出發し長き旅行の後オセアヌス

沿岸なるグレエの住居に達しニンフスの居を訊たるに彼等は言を左右にして其實を告げずベルセウス大に怒りて之を拷問し僅に其狀を知り得しかば去りてニンフスの居を訪ひ終に望みの品々を請ひ受るを得たりき

彼乃ち頭にはアイデスの靈甲を戴き手にはヘルメスの贈りたる鎌を携へ脚には翼ある鞋を穿ち飛てゴルゴンの住所に至りしに彼等は恰も熟眠し居たりき天使豫めベルセウスを戒めて曰く人ゴルゴン姉妹を見る時は直に化石となるを以て決して彼等の面を見る勿れと於是ベルセウスは首を轉しつゝメヅサに接近し難なく之を殺し其首級を靈囊に盛り急ぎ其場を逃れ去にけりゴルゴン姉妹は此物音に驚き覺めつ身を躍らして飛鳥の如くベルセウスを追躡せりされど彼の戴ける靈甲はゴルゴンの眼を遮り彼の穿てる靈鞋は驚くべき速力を以て走り山ともいはず海ともいはず飛びに飛んで遠く奔り僅にゴルゴン姉妹の復讐を免れたり彼リビアの沙漠を過ぎし折佩囊中の首級より血滴りて焼るか如き沙漠の地に注ぎしに是は直に五色の蛇となり全國に漫延するに至れり

ベルセウスは猶走りてアトラス(Atlas)王國に着し國王に向ひ一夜の宿を許されむことを請へり然るに此國王は廣大なる菓園を有し其樹は黄金の菓實を結ぶを以てベルセウスのは奪はむことを恐れて拒て聽かずベルセウスは其無狀を憤り佩囊よりメヅサの首級を取り出して之を國王の前に指し着たるに不思議なるかな國王の體は見るまに大山と變し其髪及ひ鬚は大木となり四肢は大岩となり其頭は蒼天を摩するの嶺となれり今日のアトラス山是なり

ベルセウスは再び旅行を始めしか彼の靈鞋は山をも川をも飛び渡りセフェウス(Cepheus)王の

シチビア國に到れり會ま國中大洪水にて市も野も荒れ果て滿目凄愴たりと見れば一美人あり鐵鎖を以て海岸の山頂に縛せられ悲鳴の狀見るに堪へずベルセウス怪て之を人に問ひしに其狀を語ること詳なり蓋し此美婦は國王セフェウスの愛嬢にしてアンドロメダ(Andromeda)と呼ばれたり天のなせる麗質見る目眩む計なりしかば其母嘗て自負して曰く我女的美チレイデス(Nereides)に優る數等とチレイデスは地中海の女神なり之を聞きて大に怒り海神ポサイドン(Poseidon)に訴ければ海神其願を聽して大洪水を起して國を荒らし又怪獸を出して見る人毎に噛み殺さしめたり國人大に驚きリビア沙漠中のジュピタル、アムモンAmmonの宮に赴き其救を請ひ始めて大洪水の理由を詳にし歸國の後相謀りて國王に歎願して曰く事既に是に至る他に救済の途無きを以て王女を犠牲に供し國民を塗炭の苦より救へと國王セフェウスは固く拒みて聽かさりしか終に國民の請願を容れアンドロメダを犠牲に爲すに決したるなりといふ

ヘルセウスは此話を聞きてセフェウスの許に赴き己れ能く怪獸を退治し王女を救ふべければ彼を以て己の妻とせむことを請ひ國王の許を得たり乃ち馳せて山頂に赴き言を盡してアンドロメダを慰撫し再びアイデスの甲を蒙り靈鞋を穿ちて怪獸の現はるを待てり既にして天地鳴動し海水左右に開けば鱷魚の如き怪獸海面に現はれ尾を打ち掉りて水を叩きつゝ躍り懸りて美女を捕へむとしきベルセウス乃ち佩囊中よりメヅサの首級を取り出て之を怪獸の面前にさしつけけるに怪獸の體は次第に黒色の巖と化し終りぬ如此して彼はアンドロメダの急を救ひ之を携へてセフェウス王の許に到りしに國王雀躍措かず直に盛宴を張りて結婚の式を舉げむとせり然るに又々一場の騷擾を



起せり元來アンドロメダは國王の弟ピテュスの許嫁の妻なりしかばピテュスは憤怒し數多の兵を率ゐて宮中に亂入しアンドロメダを奪ひ去らむとせりセフェウスは奮闘之に當りしかども衆寡敵せず既に危く見えたるが彼は不圖メヅサの首級の事を思ひ出し直に之を取出して敵に示しければピテュスを始め其從兵は瞬時にして化石し終れり

ヘルセウスはエジツピアを辭しアンドロメダを携へてセリフス國に歸りしかば國王夫妻は盛儀を具へて之を歡迎しき其後彼は使を己の祖父なるアルゴス王の許に送り歸國の許可を得むとせるにアクリシウスは深く神巫の豫言を信ぜしかばヘルセウスの來らむとするを聞きラリツサ(Larissa)國に奔り其國王の客となれりヘルセウスは己の祖父か深く己を敵視するを悲み其跡を追ふて同じくラリツサ國に赴きしが會ま同國々王の葬式ありて投石戯の催ありヘルセウス之に關りしか其投せる石過てアクリシウスに命中して其身を殞し兼ての豫言適中せしぞ無慘なるヘルセウスは厚く之を葬りたる後アルゴス國に歸りしが己の殺したる祖父の王位に安ずる能はずチルニス(Tiryns)國王メガペンテス(Megapentes)と約して其地を交換して之に移り是所にミケーテ(Myceae)及びミデア(Midea)の二市を建たり

ヘルセウスはメヅサの首級を其保護神パラス、アテーテに獻せしかば此女神は之を納めて渠の楯の中央に附着せり

ヘルセウスとアンドロメダとの子孫は著名の者多し就中最も著れたるはヘラクルス(Heracles)にして此人の母アルクメネ(Alcmene)は彼の孫娘に當る

### (三) スをん(Ion)の話附ありをにあん及どりあん人種の濫觴

イオンは阿典王エレヒテウス(Erechtheus)の娘クレウサ(Creusa)と太陽の神フエーブス、アポロ(Phoebus Apollo)との私生兒なりクレウサは父王が之を發見して己を詰責せむことを恐れ之を條細工の籠に盛り後日の證のため黄金の首飾を纏はしめ之を洞穴の内に匿せりアポロ神はヘルメス神に命じて之を救はしめてデルフに送り其堂の階段上に置かしめたり翌朝デルフの神巫は之を發見し養ひて己の子とし生長の後神巫と共に神に奉仕せり

話變りて阿典に於てはユーボア人との間に大戦争起りて全く之を敗りしか其際クスーサス(Kuthis)といへる者阿典の將として大功あり國王大に喜び王女クレウサを與へて妻たらしめたり然るに此兩人の間に兒無かりしかばクスーサスは大に悲みデルフに市に赴き神の教を請へり神巫之に告げて曰く汝此堂を去りたる後始めて見たる兒を養ひて子となせよと乃ちイオンを見之を携へ歸り妻に語るに其狀を以てし之を子養せむとせりクレウサは己の實子なるを知らず是は全く夫クスーサスか他に有せる隱妻の産める兒にして己を欺くためためデルフの神の托宣なりと稱せるなるべしと思ひ痛く悲み憤りしかば彼の老僕はその心を憐み機を窺ひてイオンを殺すべきことを告げ一向に彼を慰めたりき

かゝることは夢にも知らざるクスーサスは盛大なる宴會を設けて養子の披露を爲せるがクレウサの老僕は進んで杯をイオンに獻し其壽をなせりイオンは古人の禮に倣ひ己れ飲むに先ち之を神に供へむとして其數滴を地下に滴せしか會ま一匹の鳩飛來りて之に觸れしに直に斃れ死せりイオン

之を見るや直に老僕を捕へ詰問すること甚嚴なりしかは老僕狼狽して彼を毒殺せむと試たる旨を自告し且つ彼の母クレウサは其發起人なるを述たりイオン色を變して起ちクレウサを詰り將に甘心する所あらむとせしに神の引合に依り偶然デルフェの神巫入り來り此騷擾を見て詳にイオンの履歷を語り其證として彼の首飾を出し示せりクレウサは之を見て始めて其實子なるを悟り深く其罪を悔ひイオンに其實を告げ茲に目出度母子親睦するに至りぬデルフェの神巫は猶豫言を發して曰くイオンは他日大國民の父となるべく又クレウサは他の兒を擧げて之をドルス(Dorus)と名くべく是亦た大國の父となるべしと此豫言は後果して適中せり前者をアイオニア人種といひ後者をドリアン人種といふ。

(四) デダールス(Daedalus)及イカルス(Icarus)の話

デダールスは前出のエレヒテウスの子孫にして阿典の建築者彫刻者及び器械師なり此人は大技量を有し阿典美術の進歩は主として此人の力なれども又其自負も甚しく彼の甥にて彼の弟子なるタルス(Talus)といふ者新に鋸及ひコムパスを發明せしかばデダールス大に之を憚り終に之を殺せり其事露はれてアレキパガスの法廷に召喚せられ死刑の宣告を受たるか一夜脱獄してクリト島に奔り其國王ミノス(Minos)の客となれり

彼はミノス王の優遇に酬る爲め工夫を凝して有名なる螺旋堂ラビリンスを作れり是は一大殿堂にして無數の秘密室を有し廊郭縱横一度入らば復出つる能はず現にデダールスすらも嘗て途を失し辛ふじて死ることを得たりきといふミノス王は此堂中にミノタウル(Minotaur)といふ怪物を養へり是は

人間の體を有し頭は牛なり

既にしてデダールスは國王の己を遇する名義は賓客なれど其實は囚人の如くなるを憤り機を見て遁逃せむと欲し日夜工夫を凝らして己及子イカルス(Icarus)の爲めに人造の羽翼を作り一日クリタ島を飛び出せり其途中に於てイカルスは喜の餘り父の嚴命を忘れて太陽に接近せしかば翼を體に固着して蠟溶解し海に陥りて溺死せり其死屍の漂着せる島をイカリア島(Icaria)といふ後デダールスは志々利島に到り國王コカルス(Cocalus)の優遇を受け多年此所に留まりしかミノス王之を聞き自ら兵を率ゐてシ、リイに起きデダールスを引渡さむことを逼まれりコカルス詐りて之に應じミノスを宮中に招き之を殺せりクリタ人は其死屍を携へ歸りて厚く之を葬り其墓の上にアフロダイトの殿を建たり

デダールスは其身を歿るまで志々利島に留り種々有益なる器具を作れりといふ

法憲餘錄 (二)

在法科大學 乾 燥 生

(三) 我憲法に於て必らず法律を以て定めざるべからずとせる事項(立法事項)に對し法律を以て其規定を命令に委任し得るか

甲曰く 憲法は天皇は必ず議會の協賛を以て立法權を行ふべきを定めたり法律は唯一種のみ

即ち天皇が議會の協賛を以て定めたるものは是なり故に立法事項に對し法律を以て其規定を命令權に委任するは議會の職掌を全うしたるものにあらず議會の立法に參與

乙曰く

するは權利にして且つ義務なり其權利を抛棄し其義務を盡さざるは違憲の行爲なり立法權の抛棄は我れ其違憲たるを知る然れども問題の求むる所は立法事項をは法律の委任に因る命令を以て規定し得るかにありて立法權の抛棄云々にあらず所謂立法事項なるものは憲法か或事項は法律を以て規定すべきを定めたるものにして其如何なる方法に因りしを定むべきかは憲法の間はざる所なり故に（法律か細目に至るまで規定するは立法の一方方法なるべけれども今其方法に出でずして）或範圍を定めて規定を命令に譲りしも委任するも亦法律を以て定むるの一方方法なるを失せず法律は一々の場合につき一々の條則を設くるの煩を省き單に命令の定むる所に依ると云ふ形容の下に諸般の場合を概括して概括的立法の方法に依るも毫も差支なし従ひて概括的の立法即ち法律を以て立法事項を命令に委任するも立法權の抛棄にあらず却て立法權の實行なり立法權の實行は違憲たるの理由なし、

甲曰く

乙論の所謂概括的立法の範圍極めて漠然たり假りに其の範圍極めて廣きものとすれば若し議會が開期中提出せられたる凡ての法律案を審議せずして何れも同一様に「命令權の審査訂正する所に依る」若くは「命令權の定むる所に依る」と議決せば奈何、或は又「爾來刑事法は凡て命令の定むる所に依る」と議決せば奈何乙論の論旨を貫く時は是れ亦立法の一方方法となるなり豈其理あらんや余輩は其の如き議會の行爲を名けて立法權の抛棄といはんと欲するなり已に其種の行爲にして立法權の抛棄と

名くること可ならん乎則ち或一法律を議會が細目まで制定するの勞を省き命令の定むる所に依ると決す亦立法權の抛棄にあらずや何となれば兩者は Similar のものなればなり

假りに乙論の主張する所を許すとすも乙論にては憲法の精神か破るゝなり憲法か立法權を獨立せしめ臣民の權利義務を重んじて立法事項を定めたるの趣旨は乙論にては没却せらるゝなり憲法か或事項は必ず法律を以て定めよと命ずるに係はらず之を一も二もなく命令に委任せば安ぞ憲法の精神に協ひたりといひ得べけんや

乙曰く

甲論は立法權の獨立云々を説くと雖も杞憂なり議會か細目までも規定せんと欲すれば則ち規定し得又命令に委任するを欲せば委任して可なり其の孰れか一を執る撰擇の自由は議會にあり是れ即ち立法權の獨立なる所以なり若し議會は其の撰擇の自由なきと甲論の如くならば却て議會は自由を失ふものに非ずや又立法事項云々を説くも已に述べし如く憲法は單に或事項は立法すべきを定むる耳其の方法は則ち問はざるにあらずや然るを立法事項とは細目に至るまで其の條則を法律にて定めざるを得ざるものと前提して説くと甲論の如くなるは却て憲法の精神を破らざる乎

又實際上よりいふも憲法上あらゆる立法事項につき其の細目を一々の場合に應じ設くるは不能なり警察規則の如き殊に然り何となれば警察規則の如きは時と所に因り變化極まりなければなり現に明治廿三年法律四十八號の如き憲法廿三條に依る立

法事項を命令に委任し居るにあらずや此等は概括的立法の一例なり

(四)賣主(甲)土地を若干の價にて賣らんとを約し買主(乙)之を承諾すされども未だ之を買ふことを約せざる場合に契約は成立するか否

甲曰く

契約成立せず何となれば契約には意思の合致を要す意思の合致とは二人以上の意思を要することを云ふなり講學上申込と承諾との二を要するを云ふ然るに此場合に約束をなすものは獨り甲に止り乙は毫も約束をなさずこれ所謂單約 (Polichie, einseitigerpflicht) なり

乙曰く

條件付賣買契約成立すと而して其の條件は乙土地を買はんと欲せばと云ふ條件なりと

丙曰く

無名の條件附契約成立すと先甲説を駁して曰く夫れ單約とは甲土地を賣ることを約するも乙何等の答辭をもなさず兩人の意思合同せざるものを云ふ然るに此の場合には甲土地を賣ることを約するのみならず乙又其約を承諾することを假言せり故に單約と云ふべからず次に乙説を駁して曰く賣買とは双務契約にして結約者の一人一物件を與ふることを約し他の一人代價を拂ふことを約するものを云ふ然るに此の場合には約束をなすもの一人にして物件を與ふることを約するものあれども代價を拂ふことを約するものなし故に賣買にあらずされども已に甲賣らんと云ひ乙之を諾する以上は無名の條件付契約成立す唯尋常の賣買と異なるところは乙之を買ふことを約

丁曰く

せず故に乙に代價を拂ふの義務なきの一事なりと(修正案五百五十五條)  
契約成立せず唯後日賣買を取結ぶの約束に過ぎず若し賣主にして買主より請求を受ければ契約を取結ぶの義務を負ふに過ぎずと(已成民法財産取得篇二十六條)

戊曰く

當事者の意思を解釋して決せざるべからず若し意思不明なる場合には先慣習によるべし此場合に當事者間に契約を生ぜしむる意思ありとは一概に斷ずべからず若丙論者の説に従へば乙買はんと欲せざる以上は甲は申込に羈束せられ未來永劫乙の承諾を待たざるべからず乙果してかゝる意思にて諾せしものなるや疑はし故に契約成立せずと云ふを可とす

己曰く

戊論者の言の如く申込は其自身にて羈束せらるべき性質のものにあらずされども甲は申込を以て乙を釣出したるものなり故に甲は申込の責に任ずるを要す故に契約を成立せしめて乙を保護すべし故に契約を成立すと云ふを可とす

# (五)意思主義 (Willens theorie) と表示主義 (Erklärungs theorie)

行爲とは意思の表示を云ふなり法律行爲とは法律上の効果 (Rechts veran derung) を生ぜしむるを目的とする意思の表示を云ふ而して意思と表示とは常に符合するものに非ず又其の意味常に明瞭なるものにあらず故に或る意思表示ありし場合に其表示何を意味するかを知ることは能はざる場合には専ら其の意思に依るべきか又は表示に依るべきかの疑問を生ずこれ意思主意と表示主義との唱道せらるゝ所以なり

意思表示に關する學說中最古の行はるゝものを意思主義となすこの主義の特色は表示の意味不明の場合には専ら眞の意思に依るべしと云ふにありこの主義は羅馬に起り佛民法に入り日本已成法典亦之を採用せり輒近に至り英獨の學者は反對の意見を主張して曰く法律行為は眞の意思を問ふを要せず唯其形のみを以て考ふべしと學者之れを稱して表示主義といふ蓋法律行為は意思を以て基礎となす意思なくんば法律行為なし故に原則として意思を問ふべきことは理の明なることと考ふされども常に意思のみによるとすれば時に第三者を害するの恐れもあるべく又取引の安全保ち得べからざる場合もあるべし是に於てか原則としては眞の意思を探りて判斷するを要し意思と表示とが全く異なる場合には表示によりて決すべしとの學說生ぜり之を折衷主義と稱す詳しく言へば意思と表示とが全く相違したる場合（錯誤の場合）には意思表示なきものと見做し其第三者を害する恐れある場合並びに取引の安全を保つべからざる場合に限り表示に依ると云ふにあり

斯く理論は明々白々なりと雖其實際の適用に於ては大に迷を惹起する場合あり今一例をとり之を論ぜん余天賞堂に至り店頭に列せる「アルミ」の時計を見心中私に金時計なりと思惟し之を買取りたりとすこの場合に意思と表示とは異なれり眞の意思は金時計にあり表示は「アルミ」時計にあり故に若し折衷主義に照し先づ意思に重きをおくときはこの取引を無効となすべきなり是羅馬法の要素の錯誤（*Error essentialis*）

にして取消原因の一なりき之を今日歐洲の法律に照し考ふれば佛の所謂 *Erroursur la substance* につて獨の *Pandekten* の所謂 *Irrthum über blossen Eigenschaften des Geschäftes objects* に相當し無効又は取消の原因の一たりこれ蓋意思表示は當事者の意思が基なり其意思は眞實ならざるべからず錯誤に陥り一時ある意思を表するもこれ無効なりとの理論に出でしものにして意思表示の點より云へば余はこれを正當なる斷案なりと信ず然るに近來有名なる某博士の説に曰くこの場合に意思と表示とは異なることなし一時にもせよ誤にもせよ意思ありしに相違なし余が金時計と誤解せしは此れ即ち余が買ふに至りし内心の理由にして彼の緣由（*Motiv*）の錯誤なるものなり故に此の取引は取消すを得ずとされども余輩の不敏なる之を了解するを得ず若純粹に意思表示の點よりのみ觀察すれば余の意思は徹頭徹尾金時計にありて「アルミ」時計にあらず唯だ表示が「アルミ」時計にありしのみ故に意思と表示とは同じとはいふべからず普通にいふ緣由の錯誤の中へ目的物につきなせし錯誤までを含蓄すべきものなりや否余の大に迷ふところなり緣由の錯誤と目的物の主要なる品質の（*Eigenschaft*）錯誤とは或は區別すべき觀念にあらざるかと考ふこれ余が尙研究中にあることゆゑ唯だ讀者諸君に博士の説あることを紹介するに過ぎざるなり博士尙曰く若し以上の錯誤を許すとすれば道具商は殆なすこと能はず取引の安全得て保つべからず是れ誠に然り今此の取引頻繁なる時代に一々かゝることを許し居りては經



濟上の發達に妨ありと云はざるべからず故に折衷主義に照し意思主義の例外として表示によるべきものと斷言す、

更に一例を取りて余の意見を明にせん余某平凡畫家を久保田米僊畫伯なりと信じて畫を依頼せりとす余はこの場合は人の錯誤(Irrthum)を blossen Eigenschaften der Person)を以て取消し得べきものと思ふ即ち始より久保田米僊畫伯に依頼すと云ふ意思あるのみにして毫も某畫家に依頼するといふ意思なし而して表示は某平凡畫家にあり前例は物に關し此場合には人に關す此間に逕庭あるべしと思はず若し博士の説に従ひ意思表示の點より考ふれば此の場合も理由の錯誤と云はざるべからず何となれば平凡畫家を久保田米僊畫伯と誤解せしはこれ其の人の内心の理由に存することなればなり余は如何にしても普通にいふ緣由の錯誤と此場合の人に關する錯誤とは區別すべき觀念と考ふ博士は此の場合には目的の錯誤あるものとなせり則久保田米僊畫伯といふことが目的なりと未だ聞かず博士が意思表示の點より見ての立論如何を

# 燒李園兒

淡 島 太 郎

地嶺則衆竅是已、人嶺則此作是已、獨神らず我感愴錄は何ぞ。『旅衣露けき袖を片敷きて花に宿借る東山、月影落つる鴨の川、逝てかへらぬ昔想へば、衣香鞭影世は春と噪ぐ洛陽の街、蛺蝶はか

ざる花色衣、痴蜂は窺む粉黛の香、我のみ獨夕暮の鐘きゝて交るは緇衣、嗅くは胡魔、吉法師が冢叩きし臘月夜の氣まぐれに、何を假そめの縁に可笑や怪き此羅馬男と契りてし。野分小立野を吹捲りて水田に落つる倉ヶ嶽の峯白く、さては犀川に瓊花飛びて尾山に春雨床しき折々、こゝにも一人ぼちの膝抱きてつく／＼思ふ世の様、浮華幻翳を打破するの如意も持たず、あはれ搏浪の鐵槌もなき身、蟹這ふ文に、蠹喰ふ書によすが求めて男一匹空く朽るを口惜しど、よしなきとに人知れぬ心の裡の泣の涙弄筆の命毛に滴りて紙に落し、迹見れば此感愴錄。『感愴の、懷舊の、皆是痴人の夢よりも痴なり、見し夢自忘れんとあせるは愚なれど其夢を人に説きしは天晴我ながらの至痴と思へば、那底事ぞ男兒縁へらぬ縁言に恥曝らまじうとまじさ。ましてや此男の略傳書きて其に寓して我放言の料とせんとはかりしも罪深き業、死して紙の橋渡らんも恐ろし、ましてや看ん人の如何に心うからむ。流石捨難き思なきにあらぬと彼を想ひ此を思へば、えゝ紐、所詮は惡因縁、許せ此ぞ結局互の爲、戀しくば未來と、艸藁重ねおきて、七首一閃颯ときりさき八萬四千の毛孔より迸る血潮焔となして燒棄てつ、灰のみ残る感愴錄の後には心澄みて紙障に映つる梅枝影淡し、看ん人許し玉ひぬ。』

# 花 供 養

青

蛾

花曇、朧々と九重の空も鞍馬の空珠櫻、はの／＼まらむ春の曙、織るは夕の雨の絲、たつは朝の春霞、表は普賢象の瓣白く、裏は輕漾々の水青き、櫻襲、きつゝ假現の棹姫が、何語るらんかげ

留て、流に動く花の唇、實にや榮華は驪山の夢見草、馬嵬が原の泥にそみ、消て果敢き後までも、世にうたはれし仇名艸、心にかゝる白雲をわけて入にしあと追ひし、春老ひ去りて三芳野もふる花吹雪、花の雨、雪ならば幾度袖を拂はまし、雨ならばぬれて歸らんさくらかり、一陣の春風に、鎧の袖匂ふ關路の風流も、兩行のからうたに、心のまことあるし、行在の春雨も、昔語りとなら櫻、美人英雄共に悠々、梢の花は根に還り、水は流れて還らねど、香をば傳へし花衣、そもや春の花は上求本來の梢にあらはれ、無見頂相の面影ありて、長樂の鐘の音も茲につきぬ、一刻千金の夜櫻は、嬌聲を聞かぬと檻前に笑み、蘭麝はたかなくに自ら清香あり、落英をふんで共に少年の春を惜しめはにや、燭を乗りて夜遊ふ故人あり、見ぬ天竺の沙羅桑樹の色、我はしらねど、敷島の大和島根の花にまさらめや、茲に一簇の落花を古扇にうけ來りて、春風に散りし花神の翳影を弔ふ

### 小蓬萊春旅記

弄 界 居 士

「ロングフエロー」曰く不健康の生活は重荷なり健康の生命は歡喜悅樂なりと吾人は歡喜悅樂を欲す健康を保全せざるべからず健康を保全するの道天然に親むを以て最も可なりとす而て旅行は此目的を達する最好方便なり今や學業少しく閑に陽春風温に水滑なり蓋旅行の好時節遊心勃發禁ずべからず況んや能灣尾水のはどり元昆が予の來遊を促さるゝ郵書は片々として落花の如く我掌に落るあるに於てをや

三月廿九日昧爽褥食旅裝を整へて家門を出づ夜來の春雨まさに晴れ朝暾僅に天神が森をてらし曉色甚だ佳なり忠魂堂を淡霞靄々の裡に望みて淺野川大橋をすぎ數町にして大桶郊端に出づ曉風面を拂ふて神氣轉た快なり連れる松樹の間を施々として歩み森下をすぎ二日市さへ津幡にて越中往來と別る金澤より此地に至る電線凡て八條七條は富山方位に向ひ一線遠くさるものこれ即ち七尾に達するものにして蓋予が旅行に於ける眞實歎かざるの嚮導者たりしなり道側の松樹列ること漸く粗に村を送り村を迎へて宇野氣をすぎ川に沿て進み高松村に至り小憩す此村をさること二里餘大海川をすぐ下流海岸に至るまで禁漁場たり左右砂丘相連り松樹繁茂す風光愛すべし時正に十二時日天に中し樹影短し乃ち小流を前にせる砂丘に上り老松の影に憩ひて携ふる處の午飯を喫し將に去らんとするに當り校帽を戴き相共に語り來るものあり大聲之を呼べは三好島田中村の三君なりきこゝに於て全行凡て四人談笑相共に進み麥生をすぎ松林中に小憩し敷波にて三友と別る我は右し三友は左す蓋三好氏等の一行羽咋よりして能州を一周するの目的なればなり敷波村の東南遙に末森城趾を望む天正十九年奥村助衛門等佐々成政の軍をむかへ大戰せし處なりと云ふ行くこと二里餘にして子浦村をすぎ飯山に達す時正に五時日西海に沒せんとして暮色蒼然雲雀の聲已に麥畑におち晚鴉鎮守の森にさわぎて前途尙遠く疲勞亦甚し自ら勵して進み七時頃漸く高畠に達し逆旅に投ず此日行程凡て拾四里

三月卅日快晴六時半高畠の宿舍を發し恭く親王塚を拜して進行す塚は小田中村の高處にあり往還に面す老松古柏鬱として柯を交へ畫尙くらし聞くこれ能登親王の御塚にして其頂概方十一間餘高

さ七間半周廻百二十間ありと云ふめぐらすに木柵を以てす反側に龜山あり其名の如く龜狀をなす高さ四間計なり眉丈山麓朝霞淡々として書くが如きを眺めつゝ過ぎ行く沿道の村舎皆梅樹一二株を植う花唇春風にほころび脈々として旅装に薰ず快云ふばかりなし

檐ごとにかはれる梅にあとらすて此むら人のこゝろきよきや

二の宮をすぎ徳田村さへ進むこと里餘にして地や開潤黄葉青麥つくところ淡霞靄々の裡遙に森茫たる春海を見るこれ七尾灣なり午前十時頃予は元昆が慈顔に迎へられて其寓に投しぬ薄暮妙觀院を觀る院は七尾町を距る町餘の處にあり危巖丘上樓門をたつ樹木隱々影くらきところ石階をふんで丘上に登れば遠波淡くして近波濃く白帆風をはらんで去りまた來る頼翁が遠帆如坐近帆行の句殊に其妙なるを覺ゆ遙かに淡霞に覆はるゝは能登島か

心ゆくながめなりけり夕まぐれかすみたなびくのどの島やま

殘雲點々右方に聳ゆるはかの上杉霜臺が一夜秋天月清く故山を思ふの情頻に動くの時藥を横へて「霜滿軍營秋氣清」と吟せし城山にあらずや灣を眼下に望み能越の景掌に取るが如し奇趣妙觀實に其名に背かざるを覺ゆ歸宿談笑寢につく旅魂灣頭の月にとんで枕頭の燈火影甚だ幽なり

三月卅一日快情前日に異らげ午下萬清園に遊ばんと欲し元昆と相携へて出づ途中すぐる處東港附近松樹海岸に連生し青田白鷗とんで風光眞に愛すべし

うちよする波をかはらぬとちとしてまつは幾世のかげうつすらん

きえのこるゆきかと思ふこゆるきのいその田の面にあそふかもめを

園は萬行村の豪農宮本清右衛門の私園七尾を距る四町餘の處にあり園内築山あり泉石あり植うるに梅櫻桃李を以てす梅樹正に花をひらき花香園中にみちまた旅情を慰むるに足れり歸路白井の湯に浴す冷泉を温むるものにして樓上樓下浴客甚だ多し

晡時ゆきて岩屋の靈泉を見る七尾町を距る三四町巖岨中より湧出す其水清冷三伏の盛夏もかるゝことなしと云ふ洞輻入ること三間餘巾四五間あり有名なる七尾酒は悉く此水を以て釀造す巖上の樹枝鞆屨累々たり其何の故たるを知らず此夜星斗爛々として晴空一碧拭ふが如し

四月一日曉起天を仰げば陰雲四塞全く前夜の豫想に反す已にして雲漸く散し天亦清し乃ち和倉におもむかんと欲し漁船第一能登丸に搭ず船室入滿ち促膝儕肩雜沓甚し乃ち甲板に上り四方の風光を觀望す九時漁笛一聲七尾灣頭を離るれば陣々たる惠風吟懷をふき沿海の巖壁來玄妙極なし白鷗とぶ處屏風崎を左に望み辨天島を右にみつゝ十時和倉に上陸し礪泉宿和歌崎五衛門方に入り入浴午飯を喫す

和倉の名たる舊地誌に湧浦と記せり蓋し礪泉の湧出するを以てなり其發見を原ぬるに平城天皇の御宇大同年間圓山の溪澗より噴出せしものにして文徳天皇の御宇天安元年に至り少名彥神を祭る當時より世人病に効あることを知るものなり而して永正年間之地震に湯脉を海中に轉せりと今に於て圓山を麓に湯裕の稱あり後數十年の星霜を経て海中を埋立小島を築き渡舟を以て浴客を通はしむ文化年間に於て新田開墾し長橋を架し以て歩行入浴するの便を圖れり然れども大に世に顯れざるは北陸の僻陬にあるを以ての故なり維新以降人智大に進歩し泉質を分拆して以

て靈泉たるを知り浴客日を逐ふて増加すと雖も僅々五六の近國にとゞまるのみ幸にして明治十三年獨乙國に於て萬國鑛泉博覽會開設あり仍て我鑛泉も亦之に出品し卓絶の名譽を得始て大に世に知られ俄然隆盛を招くと雖も旅宿は茅屋狹隘にして湯室は依然海中にあり之に通俗するの不便尠からざるを以て全年以降湯島の周圍を埋填し樓閣を建築し粉壁彩欄頗る莊麗を盡し開豁新鮮の空氣を流通せしめ家毎に竈を設け以て鑛泉を引用内湯となし飲用水は圓山より溪泉の清淨なるを引き魚介は眼界の海洲より漁り風雨の期や籬圍あり以て之に供し菜蔬は近傍の畔より取り日々の供給に便せり(和倉鑛泉場獨案内)

以上は和倉の沿革現時の情況なり泉質は格魯兒那篤留護鑛泉にして無色澄明無臭味苦鹹反應は微弱亞兒加里性にして温度は實に華氏寒暖計百八十度にのぼり防腐變質解凝發汗下池の功能ありと云ふ午下四點鐘和倉を出發す行くこと一町餘圓山に公園あり天然の妙人工の巧と知まち景色甚だ愛すべし山頂に對勝閣あり能越の景一望に盡く沿道時に山にそひ海にのぞみ進んで石崎村に入る村家悉く土藏造なり之れ火災を憂ふるが爲なりと云ふ薄暮七尾に歸る此夜地震あり

四月二日快晴片雲を見ず古人が煙籠幽渚、波瀾涵遠島、青山綠水依々相連、白鶴粉島遊其中、釣艇魚舟泛其間、或長烟一空含瀟湘、皓月千里吞洞庭、岸芷汀蘭郁々青々、浮光耀金、靜影沈璧、釣笛漁歌遙相聞、と記せし小蓬萊の内景奇趣妙景あくなしと雖も俗事意の如くならず此日元昆が寓を辭して歸路につく先に予を迎ふるが如くなりし能の山今や遠靄朝霞の裡予が行を送るものゝ如し二宮高島飯山をすぎ子浦村を遠く虚無渺茫の間に送り敷波村にて午飯を喫し二つ屋を行くこ

と里餘にして人車をかる萬目の江山交代迅疾人目をして送迎に暇あらざらしむ高松宇野氣をすぎ津幡に着し茶肆に就て小憩す時正に六時車をすて、徒歩す森下をすぐる頃日は全く西海に沒し暮色蒼然として遠きより至る八時歸宅家人を驚かす時に月未だ東山の上に出でず星斗爛々として庭前の梅花影淡々たり

# 懷 舊

九 華 生

人の世にある塵事多忙煩累蟬轉吾人を惱死せしむ、而も猶終日營々として其業を軋ひ悔ひさる所以のものは何そや、希望あるか爲のみ、希望なきの人は死す、假令其肉體は存するも精神なきの木伊のみ土偶と何ぞ擇はん、曾て聞く、佛の學者、某年月日、地球他の遊星と衝突して地軸裂け乾坤壤頽するを豫言せしや、人民狂奔家を毀ち産を抛ち暴飲漁色以て期を俟ちしといふ、此の如き所以のもの豈に希望なきの致す所に非ずや、希望は吾人の生命なり、然りと雖も希望の影は薄らき易く人事意の如くならざる十に七八、而も稍もすれば希望は空想と化し、五里霧中徒に樓閣を畫ひて邯鄲枕上の廬生たらさるもの果して幾人かある、空想や味寔に甘美、然れども人一たび此幻影を追はんか、魑魅忽ち四方に現はれ之を魔窟に投せすんは已まざらんとす、然らば則ち吾人終に悶殺せられざる可からざるか、否、失望する勿れ、吾人は唯一の慰藉を有す、懷舊即ち是れなり、蓋し懷舊の情は兒童の慈親に對するか如きか、濃にして且温、無邪氣にして限りなきの情緒あるものなり、然らば則ち懷舊とは抑何そや、身往時の「我」に歸りて其境遇を再現する

をいふなり、懷舊の光線一たび吾人の胸臆を射らんか、習々たる春風懷裏を吹ひて轉長空駘蕩の感あらんとす、張籍曾て歌ふて曰く、「洛陽城裏見秋風、欲作家書意萬重、復恐匆匆說不盡、行人臨發且開封」と、遊子家郷を悲む此の如く夫れ切なる所以のもの抑懷舊の念事に觸れ時に應じて胸中に往來し、薄らきし印象を新にし、父母、同胞、故舊、山川の愛、歡樂、悲哀の念を深くすればなり、豈に夫れ望郷のみ然りと謂はんや、凡過去の事々物々咸な懷舊の料たらざるはなし、之を大にすれば忠信孝悌、之を小にすれば山水風色の愛、悉く懷舊の清泉より迸り來らんとす、懷舊は天の吾人に與ふる清福なり、慰藉なり。

余曾て京都に寓する數閑月、居眞如堂の邊にあり、東は即ち布園着て寢たる姿や東山、西は即ち逶迤たる神樂岡、前は即ち遙に市街人煙の揚るを見、後は即ち一帶の白河の田野、朝に神樂岡の清風に嘯き、夕に眞如堂入相の鐘に心を澄まし、萬丈の紅塵俗腸を勵ますなく、清冷の氣獨り我懷に入る、優々自適するもの晩春より仲夏に及ぶ、桑下一宿猶戀々の情ありとかや、況んや山紫水明の境をや、今に至りて此樂再し難しとなす、

時正に初夏、楊柳春風の院を鎖して花落ち紅謝し、殘蝶未た花後の梢を離れず、翩々たる燕影簷を掠めて斜に翔り、新鵲連りに人の離情を牽き泣氣氤たり、若し夫れ杖を郊外に曳かんか、麥隴正に秋を報して菜花黃金の濤を漂はし、簌々たる新篁籜を解かんとす、淡靄は搖曳春の倏忽たるを悲み、池塘は轉梨花夜雨の門を閉するを歎す、偶機を獲て仙洞御所を拜觀す、當時記あり曰く、

(上略)南門より入る、古松森立、籟音高く泉聲急なり、樹間を縫ふて進めば、大池瑠璃の泉を

湛へ、汀に奇石亂立して苔は厚く笹は繁し、こゝに一森、彼處に一谷、山あれば流あり、果樹あれば芳草あり、曰く石橋、曰く苔逕、目觀るに忙しく手指すに煩はし、清らなる小徑池に沿ふて四方に通し其止まる處何處ぞ、蹈みしむる足跡に御沙を汚して進めば、風雅なる茶亭木の間隠れに見ゆるも床し、飛瀑鞞聲の聲は林樹を通して來りぬ、そは何處と探りなは、奇石仄崱苔蒸し木之れを蔽ふの際、水沫散して霧となり雨となり、流れて池に注ぎ谿に下る、池に架するの石橋は藤棚之れを蔽ふて紫の振袖を垂れ、橋下に戯るゝの細鱗は得意顔に餌を爭ひぬ、其他畫の如き泉流丘山、得もいはいはれぬ景色、まさにこれ天上の美人降つて舞ふ處かと疑はる、まことや昔 上皇名臣を率ゐて時に遊觀し給ひし處、貴嬪宮女の時に蓮歩を運ひし處、今や名もなき賤の身かこゝに御沙を汚すも、實に民と樂を共にし給ふてふ 大君の深き御惠にそある、感泣晷を移して門を辭しぬ。

月や何そ多恨なる、管相丞筑紫の極に懷舊の涙を濺き、仲國は嵯峨の奥に琴聲腸を斷つ、仲麿か異郷の空に三笠山を懷ふ、源冠者が足柄山に笙聲天籟と和する皆此月夜に非らずや、月や素と無情、觀る人によりてまた情あり、予性狂狷風流の韻事を解せず、然れども月に對すれば嚙昔の感禁する能はず、一夜圓月高く懸つて影蔭娑婆たり、乃ち歩いて兼六園に遊ぶ、時正に初更、萬籟寂として四人語なく、茶亭の殘穗光淡くして池邊玉露繁し、四邊蕭條、唯大月の松影を照して地上虬龍の躍るあるのみ、仰て天の杳々たるを見、俯して地の悠々たるを觀、感慨連りなり、嗚呼昨舊都月明の夜予興に乘して漫步遂に熊谷の墓を吊ぶ、當時密かに歎して思らく、人生蜉蝣の



如し、三日汗なくんは死せんのみ、親鸞仇櫻を歌ふて深く人生の無常を諷咏したるもの洵に以あるなり、唯願ふ所は男子桂蘭となつて摧くるも蕭艾となつて存せざるにありと、氣沈み心閉ち茫然佇立するもの少時、乍ち後邊聲あり、曰く、久潤、九華生かと、驚て顧みれば我桑陽子なり、彼復曰く、予昨此地に来る、今夜君を寓に訪ふて得ず、即ち月を踏み來て古寺を吊ふと、予曰く、然るか、請ふ相共に別後の情を叙せんと、石に踞して談話疊々更の深くるを覺えさりき、嗚呼桑陽子今何の處にか在る、先きに我國清國と響を開き皇師赫怒師を整ふるや、桑陽子亦一年志願兵を以て戎軒に従ふ、鴉邊漠として鐵笛烟樹に響く仁川の晨、篝火燃え盡して悲風胡笳を送る京城の夜、子槩を横へて搏虎屠龍の慨あり、已にして我軍成歡牙山を陥れ、鼓噪土を卷いて平壤に向ひ八月十五日大に虎山に戦ふ、砲煙空を蔽ふて日光なく血河流れて叫聲天に震ふ、時に桑陽子連りに銃劍を振ひ挺身敵兵に突貫す、偶流彈あり來つて其胸を貫く、桑陽子叫て曰く、我事休矣と、終に瞑す、悲ひ哉、子の將に海を渡らんとするや、書を予に與へて曰く、男子生れて千載の一時に會ふ、本懷之に如くものあらんや、我唯一死あるのみと、是に於てか果して然り、嗟乎疇昔我が双影を照らせしも此月なり、今夜我孤懷を射るも亦此月なり、年々歳々月相同し、歳々年々人同しからず、桑陽子世を捨て、より茲に二歳、幽冥地を隔て、溫容杳として接する能はず、悲ひ哉、時に癡雲光を蔽ふて四面暗く風は樹梢を渡つて葉々聲あり、低回去る能はざるもの多時即ち歸途に就く、會月暗雲を出で、光蒼然、公會堂の華鯨吼ゆること連りなり、指を屈すれば正に二更。



くやみ草

(雪深き冬の夜に亡き父と朋友を憶ひ出て)

不 眠 坊

憶友に別れて而て後に友情の切なるを見、故郷を去て而て後に家庭の樂しきを解し、親に離れて而て後に恩愛の深きに泣き、孝養の缺けたるを懷ふとかや。人世の離別てふ悲哀の琴線に撲たれては、力山を抜く蓋世の項羽さへ、猶數行の暗涙せきあへぬ別はありけり、まいてや紅顔の處士多感多涙の吾曹に於てをや。若しそれ梧葉風なきに散り、暮鐘幽陰に響いて、晚鴉林に還るの夕學窓のもと、短檠を擁して、冥想兀坐、茫乎たる過去の身世を顧み過れば、坐るに今昔の忍ばれて、懷舊の情轉た堪え難きの時、まづ幻影となりて吾念頭に浮動するものは、亡き天涯の朋友と父なり、あゝ亡き父と亡き朋、憶ひ臻れば一團の胸襟は、つねに勃然として燃え出づるの悲愴を如何せん。

そも／＼去年の今月は、家君危篤の飛報に接して、驚惶周愕、晝夜兼程はせて敦賀に着き、煤烟一抹江湖を過ぎり、鐵路東折、さらに五十三驛を電奔して帝京に泊し、翌また東歸の瀛車に搭して、遂に刀水の北筑波の東、吾が最愛の郷里に歸り、まもなく家君の仙遊を慟哭するの悲嘆にあひぬ。爾來風木の感、心を傷まし、瞑日に會ふ毎に、江色嶽聲みるもの聞くもの、いよ追悼の情を切ならしめて、涕淚滂沱かつて五月雨の晴るゝま無きに、日月の流れ混々として逝て盡きず何時しか夏も過ぎ秋も老て、紅葉踏み分け鳴く鹿の聲も哀れに、霜枯れの冬を迎へて、端しなくも、茲に亡魂の一回忌を祭つるの頃とはなりぬ。

家君、性俊嚴にして豪邁、弱冠擧げられて雄藩の儒員に備はり、傍ら又砲術の蘊奧を極め給へり

かの浦賀の霹靂に桃源の夢攪き亂れてより、東叡山の血烟に葵の花の凋みしまで、南船北馬、席暖き追ふかりしを、風雲の一變と俱に、超然世塵を避けて、閑雲野鶴の境に就き給へり、去れど剛稜の氣、老に連れて加はり、當年の壯慨をさゞ弛みしとも看え給はず。余れ報をえて歸省せしの日、家君、病膏肓に入りて人々の痛憂只ならざるに、猶強いて漢籍など閱みし玉ひしが、さすがは長き病苦に有りし昔の傷も失せて、豐頬の微紅も見まがふ許り落ち細み、蓬々たる鬚髯さへ今は力なげに延び給へる容顏、余れは見るからに、悲さ極り胸塞がりて、兒や今歸り來ぬと音なふだに、早や降り灑ぐ露時雨の、まばしは絞るよすがも絶えつ。父上も最といみ情ろ迫り給ひけむ、顔そむけ給ひて、千萬無量、臉を傳ふ一車のホロリ枕邊濡らし玉ひける御景色に、母上を始め一座無言のうちに咽び入りける、やがて父上言ふも苦き息つかひにて、汝は校暇にて歸郷しつるか、又看護の爲に罷りつるか、わが病痼左までには有らざる者を、若し心地よく冥旅に就かば、其折こそ葬營の爲め歸國するもよけれ、呼び戻すもよけれ、など昔に變らぬ氣丈にて戒め給ふも、自らは輕しとのみ思ほし給ひけるにや。余れは音にこころ啼かぬ血を吐く想に、胸結ばれて頓みに答へん言葉も出でざりしが、斯くと心に鞭打加へ、校暇を幸ひ歸省せしなりと、心にも無き事聞え上げしに、父上世にも嬉しげに笑み給ひて、又一車はふり給ひぬ。嗚呼此の時の余が心語るも涙、語らぬも亦涙なり、況てや其の御臨終に侍りし時の心をや。

初七日の逮夜を終てのち、吾は涙の中に行き整へつ、軀がて寒氣に向ふ綿入の、やれ肌着のと母上の手つから裁ち給ひし衣服に、まだ乾かぬ袖の涙うつして、水鳥の羽音も寒き極月の下浣、獨

り悄然として郷を辭しぬ、家立出づる時、母上門邊まで見送り給ひて、日數重る旅路なれば、此方よりは旦暮御身の無事を祈るにこそ、言ふまでには侍らねど、夕には早く宿借り夜明けずば立ち給ふな、名も知らぬ菌魚勸むればとて食べ玉ひそ、寒さも去年よりは強ふ覺ゆるに、道すがらの雪も深かるべし、風邪なと夢引き給ふな、別れと云へは束の間も思遣りせらるゝを、と言ひさして涙ぐむを、余れは心や弱し螢雪の光に業研きて、恙なく歸り來る日を待ち給はれ、去らばと許り盡きぬ思ひに、乗り別るゝ車の後影、消え行く迄も餘情惜げにイみ給ふ母上の御姿、男々しく振り回り見るも叶はで、噛みしむる涙の泣かじと思ふ程猶溢るゝも女々し、嗟呼誰か泣かぬを男子とは定めし！。

瀛車發するに臨み、莫逆の盟友と袂を分ち、窓に倚りて故園の光景に對す、見渡せば、巍々天を摩せる我水陽城の牙櫓、麗々神の成せる我湖畔の偕樂園、依稀たる其の影の心がらにや、けさは分けて憐れげに映ずるも悲し、懷ふ、渠は君賢英士雲の如く産みて、大日本史を出し、尊王攘夷の木鐸として永く海内に雄視し、一は高節の士、千枝萬葉の香り馥郁として、今も天下三公園の一位を占む、あゝ此城と此園、余れは幼より負ふ所多く、嘗て出關の折も、郷黨は余が爲に祖道の盛宴を此の園に張り、而て又是の城畔の停車場に余れを送れり。當時竊に期す、他年學成り業遂げて、錦衣この城この園を訪ふの日は、願くは滿腔の赤誠を披きて郷人の醇心に酬ひ、一つには又双親を高臺に奉じて、盛名奉養兩ながら全ふするを得んかと、圖らざりき、松壽千年遂に朽つることを知らず、空く天驕に歌ふて、つれなくも吾か悲慘の北征を送らんとは、と感いたりて悵

恨無限、朦朧の眼にも吾は故郷の空、影見えぬまで回顧すれば、心なの瀛笛幾度か短亭を送り長亭を迎へて、亭午小山驛に着き、兩毛鐵道を乗りて此夜は上野國高崎町に泊りぬ。

翌曉、一番列車に搭じ、右に日光の靈嶽を望み、左は妙義の劔嶺を仰いて坂東の沃野をはしる、森飛び家走り山移り川顯はるゝ慰みは有れど、余れは尙模糊たる筑波山の姿のみ忍れて、安中驛に停車せし折、首投げ出しふりさけ見れば、悪くや屹たる馬耳の双峯、今は霞隠れに一連の雲と流れて、鳴き渡る雁の亂れ行くなど、征客坐ろに腸を斷つ眺めなりけり。

斯りし程に車は横川驛を過ぎ、既にして碓氷峠のアプト式大隧道を登る、この峠古來天下に響きし處なれば、連嶂峻巒嵯峨として聳え、透蛇たる九折の樵路、半ば白雲に没して緩く山腰を帶り繋々たる深溪の碧潭、苔青き床岩に碎けて疾く矢の如く駛す、見上ぐれば千丈の巖削れるか如く見下ろせば萬仞の甍穿てるに似て、さながら龍の淵に潛み虎の天に嘯くかど疑はる、常ならば快呼一番して、躍如禁す可らざる此の山靈奇勝にも、すげなく背いて、獨り日本尊東征の昔など追懷し、瞬時は聯想より聯想を追ひしも、未は復た還らぬ悔みに我知らず袖濡らすも、あはれ五尺男の心なれや。

ちらつく雪に輕井澤を下れば、信州路なり、淺間山の烟、千曲川の水、偕ては川中島嶽捨山など古來幾多の好歴史をや載せけむは知らず、吾は唯善光寺の伽藍にのみ心馳せて、長野に下車し、日頃排佛主義の郷論に鼓吹せられし身の、不思議や冷囊叩いて大枚喜捨し、阿彌陀佛の御威光に隨嬉の涙捧げしも、思へば娑婆はけに罪業深き處ぞかし。高田の邊りより烈しき吹雪に遮られて

屢停車し、薄暮直江津港に着き旗亭いがやに投ず。

夜もすがら風暴れ雪降りまきり、岸打つ濤の音の枕に通ふ凄まじさに、一睡の眠だに就らで、明くれば十二月の二十九日、名にしおふ北越の深雪に、賤か苦屋も一夜にして玉樓銀閣と化し、枯梢時ならぬ瓊花に春催して、乾坤一帯の素練、體々又蛻々として遙に信越の境に逼る、天地造化の偉觀蓋し極まると謂はんか。是の折、余れ漁船便を獲て伏木港に渡らん胸算も白ろくしや冬期とし云へば、此の津浦、皇國守る蠟燭の影さへ見えざり嘲笑はれて、然らば陸路と心早やり聞くだに戰慄する六十里の險坂雪路、踏み破りしも心強し、此日は車を驅り橈を飛ばし人肩に負はれつ、幾度か雪に惱み、風に捲かれ、波に洗はれて、橋無き小川は裳を掲げて渡り、雪崩落ちくる氣色あれば、麓にまばし待合ふも多かりしが、日暮るゝ程に糸魚川と云ふ處に宿りぬ、茲も未だ越後國なり、明日は愈音に聞えし親知らずの天險、數日の風雪に怪俄人も數知られず、隨分御注意召されよと聽きて、是夜も亦温き夢結び兼ねたり、土地の習慣とて炬燵でふものに寝たりしが、隙間洩れくる三冬の小夜嵐に骨も氷りて、埋火も有るか無きかに、ふと目覺むれば、誰が家の鶏ぞ、心も知らで曉告ぐる二聲三聲、最と身にまみて、孤客の衣衾を寒からしめけるも哀多かりき。

拂曉床を蹴て起ち、窓を推せば、凜たる寒颼戸外に吼え、霏々たる夜來の雪は、一しほ風に狂ひて舞ひ二尺許りも積りて見ゆ、惜しや此雪、隅田川邊に散り敷かば、舟浮ぶるの美人もあらん、待乳山に花と積らば香爐峰の雪とや見んものを、憐れ越路の片山里に年久くすねて、山賤か酌む

一椀の濁酒に、あたらし玉姿葩容の夕を待たず消ゆるも宿世の縁かや。今日は車も揺も立つまじと引留むるを聞かて出發す、さりと道中の難艱昨日に譲らず、況して親知らずのわたり、如何はせんと案ずるは産むの易きに如かて、今は砥の如く矢の如く穿鑿せる大道より、昔は親を顧みず子を棄てし舊難離の、蒼波渦まくを打臨むに付けても、昭代の惠風、率土の濱を吹き渡る例しと覺えられて最と目出度し、今朝よりの行程十二里餘り、夜に入りて漸く越中國泊り町につく。

次の日は大晦日にて、漁村山郭も、さすがは迎春の準備に暇なしとて、法外の賃銀に腹肥す車夫の心、憎き極みなりけり。昨日まで濁浪天に逆まき、鷺毛路を鎖し、激沫巖を噛みし海岸の嶮岨迎りしに引換へて、今日は雪霽れ風死し浪もなきて、坦々たる平路を駛れば、車上指呼顧眊の風景をも言はれず、立山の高く雪脈を貫きたる、神通射水常願寺諸大川の渾々として遠く流れたる能州の翠黛參差突入して、煙波渺茫の間に、富山灣を抱擁せる、宛然たる一幅の大活畫なり、吾是の景に飽かず眺め入りて、幾日の憂襟心よく解け、午餐に速く富山に着し、燈火に遅く高岡市に泊れり。あすは愈歸棧の思嬉しくて、今宵は亦逝き盡くる年華の名残り惜れて、寂坐沈想、切りに過去將來の境遇など想ひ續くるに、千思萬感交るゝ往來して、燈影淡く薄く、夜も更け渡るまゝ、枕引き寄すれば、やがて撞き出す百八煩惱の鐘、常よりも遠く幽かに又寂しげに、生者必滅の響に、諸行無常の哀を添へて、客懷轉た堪え難き除夜なりける。

(續く)

# 就俳人一茶坊

桐 の 家 主 人

論理的倫理的及び審美的の諸要素を以て、精成鍛造せられたる絶對的觀念を以て、千般の不完全不純潔不眞正の上に超然として浸染せず、宇宙萬物の標準として、古今を通じて常住不變なるものを、吾人は稱して理想といふ。

詩人は此の絶對的觀念(理想)を以て、社會の事物に接し、苟しくも神興益涌し來れば、胸中の靈想闕らんとして抑ゆる能はず、滾々として竭盡せず、轉瞬の間能く鏡花水月の詞藻をなす、然りと雖も、詩人は抽象的眞理にのみ執着するものに非ず、到底自然界即ち現實界を離れて存するを得ざるなり、其れ然り、然りと雖も、詩人は亦た單に寫實的識量を以てのみ、満足すべきものにあらず、其の一片の靈火波動するや、唯に自然を描寫して圓融生動せしむるのみならず、更に大に詩美的別天地即ち理想の妙境を現出躍如せしむるを以て、其の責任とせざるべからず、彼の沙翁『ミルトン』『ダンテ』『ギョーテ』の輩、千載の下能く文學界の明星として、崇拜推尊せらるゝ所以のもの、豈に夫れ偶然徒爾とせんや、

何れの國を論ぜず、人の世に生るゝや、必らず天地自然の美に驚歎し、人生時運の榮枯變遷に感慨し、之を言語に發し、之を詩歌に吟哦するに至るは、吾人之を自然の發展といふも詛言にあらざるを知る、

本邦和歌は遠く神代に濫觴し、八雲立の歌は後世人口に膾炙するところとす、唯然り、俳諧に至りては、數十百年の後に基し、恰も亂世の時とて、徒らに蕭疎凋殘の寂境を呈しぬ、元和建囊の

後文運日に開け、茲に始めて、其の光明を認むるに至れり、其の發達の端緒を開きしは、元祿寶永の頃にあり、當時俳人の足跡は海内至る所に印せらるゝに至りぬ、即ち俳諧は、安永天明の交より、文化文政の間に至りて、其の絶頂の域に達するに至れり、

是の時に當りて、寒村僻陋と雖も、苟も字を識る者は、盡く口に俳句を囁かざるなし、其の間俊逸の士、各派を立て曰く檀林、曰く正風、曰く何曰く何と之を前にしては、宗因貞徳あり、中ごろにしては、芭蕉翁あり、其の門下には其角嵐雪の輩桃花天々旗幟を一方に翻し、許六支考亦た錚々たるものなり、其の他湖十あり、蓼太あり、蕪村あり、後梅室着虬の徒亦た能く一戸をなす、一茶坊は實に蕪村の後にいで、一家をなしたるものなり、

一茶姓は小林氏、通稱は彌太郎俳諧寺と號す、信濃國水内郡柏原の人なり、寶曆十三年生る、幼にして、母を喪ふ、繼母其の所生を以て家を嗣がしめんと欲す、一茶乃ち身を風流に托して敢て抗爭せず、後ち江戸にいで上野坂本町番場に住す、其の世に立ちしは、將軍家齊の時にありて、儒者には龜田鵬齋あり菅茶山あり、頼山陽あり、太田錦城あり太窪詩佛あり、國學者には本居春庭同太平山本清溪あり、戯作者には式亭三馬あり、司馬金交あり、時に四海靜謐文教日に進み所謂我朝の『メデセアン、エーデ』となす、されば俳諧の如きも大に發達し、殆んど美妙の境に進みけり、

大凡そ俳人とし言へば、風雅を旨とし、邊幅を飾らず、常人より之を見れば、恰も常識を失へるものゝ如し、北信の一俳人なる一茶坊は別してさる傾向を有し、何れの方面より觀察するも、愚

人どより外は見えざりしなり、

嗚呼、彼れ何ぞ其れ眞に然らん、其の之を爲すに至りしは、境遇然らしめしなり、彼れの身邊は無情なり、彼の家計は日に窮迫しぬ、運命は常に彼に向つて背進せり、然りと雖も、彼は平然たり、彼は怡々樂々たりしなり、彼れの心境には、此の濁海に處するの穩波澄月ありしなり、浮世の風に遠かりし樂園ありしなり、其れ焉んぞ、昊天に向ひて其の悲運を啣つが如きの痴をなさんや、若し其れ然らざれば、何ぞそれ能く詩人たるにあらんや、

彼の煩瑣に拘々たらざるは、炎暑烘爐の中に坐するが如きの時に當りて、身縋衣を穿ち、盛冬隆寒蚊蠅を纏ひて南軒に喧をとり、唾液を以て墨を磨し、床の間に糞槽を据え、時に或は坐ながら洩するなど、寧ろ狂人に類するの舉あり、畢竟彼は實に失望の極現實的悲境を去りて、理想的生活を求めんとせるなり、故に敢て社會のあぢきなきを痛歎せず、彼は嘲るが如く笑ふが如く、擔石の儲なくして晏如たり、時に或は食ひ、時に或ひは食はず、其の恬澹無慾なること嬰兒の如し、嘗て名主嘉右衛門の歎く所となり、其の文書を編取せられければ、

故郷や西も東もばらの花

彼は世の鄙陋なるを笑ひぬ、賤劣なるを憫みぬ、

加賀侯の江府に參觀せんとするや、柏原驛をすぎ、一茶の俳名高きを聞き囑するに俳句を以てす、期滿ちて將に歸らんとし、問ふに其の成るや否やを以てす、彼れ嚙笑して曰く頓に忘却すと、侯も亦た促さずして、去る、嗚呼世の權門に諛び、追従是れ事とするもの彼れより之を見れば、寧ろ



憫むにたへんや、

一茶の性行は吾人不完全ながらも、之を述べたり、請ふ少しく進んで其の俳句を陳べしめよ、彼の俳句は敢へて風雅の言を用ひず、唯だ俗言のまゝにして、毫も粉飾を加へ又は彫琢を添ふることなし、一見せば妄言誕語以て句となすべからざるが如し、然れども退いて、潜思玩味せば、憬然として、節を打て三歎せしむるものあらん、他なし、彼れの常人より目せられて愚人と唱へられ、狂人と稱せらるゝ所以のものに此に存するなり、彼は俗流を出で、社會の情戀醜偶偽惡を抜いて、卓然超越せり、其の奇と目せられ、怪と云々せらるゝもの、世人の濁れるなり、俗眼の邪しなるなり、彼の俳句の往々人の意想外に出づるもの、豈に夫れ奇とするに足らんや、

一日郷里の孫祝にまねかれ、祝句をこはれければ、

親は死ぬ子は死ぬ後で孫は死ぬ

と口ずさみて與へけり、

目出度も中位なりあらが春

の句は一休和尚の『門松や冥土の旅の一里塚』と何ぞ其れ同工異曲なるや、これ實に人生の眞味を歌ひつるなり、彼は此の如く實に最も多分の點に於て、哲學的趣味を有せり、凡そ詩歌の美妙は自然の美を歌ひ或は直接に或は間接に物を寫して一般讀者に目之を見るが如く、足之を履むが如く、餘情油然として湧出せしむるにあるも、其の幾分かは、否な多く、抽象的哲理の觀念を有するに非らざれば、亦た以て凡庸俗骨にをはりて、完全の詩歌とすべからざるは、既に前述せるが

如し、宜なり彼れの俳句の此の至境に至りけるや、

けふの日も棒ふり虫よ翌も亦

彼是といふも當座ぞゆき佛

嗚呼是れ絶妙好箇の渾論に非ずや、其の嘗て江戸に出づるに當りて、三五の宴に列し、筆を取って記していふ

三日月の頃より待し今宵かな

何ぞ其れ天真の精妙を歌ひしや、芭蕉嘗て明月の句を歌ひて『石山の門叩かばや今日の月』と其角も亦た『明月や坐酒のまんど頬かぶり』と吟出しぬ、流石は通れ斯道の名流として、一天碧空清光の皜潔たるを歌ひ、人をして寒夜雪を嚙むが如きを覺えしむの妙あり、然れども是れ唯に寫實的に其の明月たるを咏せしに止まるのみ、未だ絶句の極と謂ふべからず、一茶の句に至りては、優情自から溢れ、人々の如何に明月をしたひ、また如何に之を待ち設けしかを巧に詠出せり、其れ然り、然らば則ち二老また一茶に一籌を輸せざるを得ざる歟、

時鳥俗な庵にさけすむな

明月の御覽の通り屑家哉

我宿の貧乏神も御供せよ

今日の日やかへてもやはり苔衣

下々に生れて夜も櫻かな

二歩封の初音出しけり梅の花  
あばらやの其身其儘明のはる  
庭の蝶子は圃へばとびく

明月を取て吳いと啼子哉

日は光る山面白し松の雪

嗚呼彼れ木強蠢愚の如き翁、亦た此の妙韻を呼出するか、爛熳として天下の妙味玩ぶに餘りあり、

やゝ暫し蟬だまれ一時雨

姨捨はあれにて候と案山子哉

乞食の佛壇見居る柳かな

三佛やぬて在しても花と錢

あらが世やあたりの草も餅となり

と又嘗て江戸にいで某家を訪ふ、適々主出でゝ在らず、乃ち筆をこひて一句をといめてさる、

我州は月と佛と蕎麥ばかり

と僅々たる十七字、山紫水明萬岳重疊なる信州の地躍然として眼前に來往するに非ずや、彼の江戸にあるや、原素丸にまなび後成美にしたがひて學ぶ、然れども彼は敢て師に拘らず、更らに師風を脱して江戸座の眼睛を得たり、

家内安全とふきけり梅の花

これで社御はとゞきす松に月

柿の木であいと答ふる小僧哉

以上述ぶるが如く、彼の境遇の可ならざるは遂ひに彼を驅て望を現世に絶たしむるに至りぬ、請ふ吾人をして更らに其の家庭の一斑を言ふを得せしめよ、想ふに彼の幼なるにあたりて、彼の繼母は彼を遇するに、甚だ酷虐なりしならむ、是の故に彼の句は最も多く親子の關係を歌へり、彼れ八歳の曉歌ひていふ、

あらと來て遊べよ親のない雀

また御殿山といふ所にて

鶯も親子つとめや御殿山

雀の子そこのけく御馬が通る

善光寺如來の開帳に詣で、

開帳にあふや雀も親子づれ

菫萱堂にて

花の世は地藏菩薩も親子哉

また

小坊主や親の供して櫻かな  
うそ寒や親といふ字を識てから

子を負うて川越す狙や一時雨  
橋上に乞食のうせるを見て

母親を霜よけにして寐た子哉

吾人は風咏の餘是に至りて、轉た當時の狀を想見し、この不幸なるまゝ子を憐むと同時に、天の此の不遇兒をして靈妙至精なる詩的人物を完全せしめたるを感謝せずんばあらざるなり、天は益々彼を苦しめぬ、無情なる風はつひに彼の最愛の伉儷を奪ひぬ、其の中元の夜歌ひていふ、

かたみ子や母が來るとて手を叩く

ついでまた死の手は彼の唯一の塊肉をとりさりぬ、嗚呼彼の現世の望は全く絶えぬ、彼は醜然として己が理想を友とし、宇宙の美を友とせり、

露の世や露の世ながら去ながら

蝶とぶや此世に望ないやうに

彼は漸く年老いひたすら佛に依頼するの念慮を生じぬ、觀音の奉納とて

唯頼め花もはら／＼あの通り

また

苦の娑婆や花が開けば開く連

此様な末世を櫻だらけかな

無限悠有限命を思ひて、

魂送りに、

此風に不足いふなり夏座敷

たれが塙も疾く頼むぞよ佛達

墨染の蝶か飛ふなり秋の風

露ちるや各明日御用心

ともかくもあなた委せの年の暮

彼の江戸に出でんとせるとき、

月花や四十九年のむだ行き

と江戸に住すること十裘葛、文化十一年十二月廿四日郷里にかへるとて、

これがまゝ終の栖か雪五尺

辭世 佛ともならでうか／＼老の松

と彼は之を告別の辭として、文政十年十一月十九日秋氣清高なるの日、遂ひに、其の最も親しき母の跡を追ひて柏原明專寺の清きまさをなす苔の下に眠りぬ、行年六十五歳、

桐の家主入曰ふ、柏原驛は信州上水内郡に屬し、長野町を距る北の方五里許、直江津より鐵車一時三十五分間にして至り得べし、若し諸君にして、短簑芒鞋、四方に漫遊するの途次一たび此地を過ぎり、此の好翁の遺蹟を憑吊するも亦た快適の一事たらんのみ

批評

本誌第九號を讀む

九龍齋主人

目の白黒美醜を辨じ、鼻の芳芬腥臊を辨ずる、等しく待つことなくして然り、心の善を好み惡を惡むも、亦是れ人の生れながらにして有する所なり、夫れ人に讚評の言あり、世に批評の事ある、蓋し數の免るべからざるところ、所謂物に感じて輒ち動き、動きて輒ち發するもの歟、而も人往々世上の褒貶毀譽意とするに足らずと云ひ、自ら高ふして蕩悍驕暴なるに至る者あり、批評豈に以て十指の一十目の一たる能はざらんや、吾子者廣聽言、大人者求多聞、以て厥德を樹て以て厥業を建つるに於て裨補なしとなさず、明治の文壇批評の聲年々に高きは、想ふに徒爾にあらざるべし、今や我北辰會雜誌號を重ねる九、月を關する十二、然るに未だ批評欄が燦然たる異彩を放ちしとなく、毎に望々遺憾と爲せり、嗟乎これ誰の罪ぞや、嗟乎これ誰の罪ぞや、何爲れぞ會員諸君猛省一番其炎々たる熱血と其皎々たる精氣とを本會に注がざるや、余言はんと欲して言はず出でんと欲して出でざると今に逮べり、偶々出づべく言ふべきの時機は來りぬ、嗟々たる百獸薈々たる萬木皆余を動しぬ、遂に默過するに忍びず、驚駭の才晦澁の筆、素より本欄のチャンとして出るの器に非ずと雖も、不遜を顧みず自ら進みて以て聊其郭隗たらむとを期す、彼の本欄の特色を發揮するが如きは余の負ふべき所にあらず、唯他日悠々たる賢明の批評家輩出して本誌の光鐸

陸離たるに臻らんと、即ちこれ余が願ふ所なり。

本號は則ち前雜誌部委員諸彦が最後の編輯物、宜なる哉通覽讀下自ら花咲ひ鳥囀る園林に遊ぶの趣ある、紙數一百二十四頁の多きに登り、諸彦の銳意盡力の趾歷々察る可し、洵に其終りを克くせるもの、其積日の勞焉んぞ深く謝せざるべけんや、惟翻りて其美を濟し其功を奏せるの如何を慮れば、則ち一言なき能はざるなり、本會々則第一條に曰く、「本會の目的は學藝を講究し體育を鍊磨し會員の徳性を涵養し以て純良なる美風を發揚するにあり」と、本誌は實に此目的を達する爲めの機關なり、然り而して其實の得て徴すべき少し、其葉蓁々たるに非んば決して天々たる桃果を結ぶべからず、徒文章鍊熟學藝研鑽の械器ならば則ち可なり、苟くも以て純良なる美風を發揚せむ以上は、頃刻も會員が徳性修養の資料を供ふべきとを心とせざるべけむや、天下滔々小を以て小を重ね、我校現時の狀態を以て甘んずべきか甘んずべからざるか、余は當に改善すべきもの多々あるを信ずるなり、又肅育すべきもの多々あるを感ずるなり、加ふるに金澤の地氣候陰濕雪多く雨多し、外、山に登り郊に出で、或は蒼穹を瞻仰し或は滄溟を俯視し、以て相俱に活潑々地其美風を養得すると敢て易からず、内能く之に比するものなくんば竟に如何ともする能はざるなり、於戲本誌が校友の徳性を養ひ一校の美風を興すべき衝路に在るは明白なるにあらずや、而して本誌の爲すところ如何、前委員諸彦が手に成れる六冊子を見るに、唯第五號を除きては這般の消息を候ふに由なし、前に「立志」の論あり、後に「朋友」の辨ありたれども、輒迂遠の嫌なきにあらず、唯彼の編輯子自らの「我辰章校風を如何せん」警告的論文は、所謂美風を揚ぐるの活文

字、徳性を養ふの好資料なりとす、其結尾に於て「噫々我第四高等學校は終に當年の松下塾たるを得ざるか」と絶叫す、意氣昂霄言語贅實頗る校友を覺醒したるなるべし、當時余も陰に同情を表するの一人なりき、爾來累月復聞として聞くとなし、是れ編輯子が七旬の休暇古郷に歸り新に蓄藏し來りしものが一時の奇景一場の活劇を演じたるに過ぎざるやの疑を萌さしむるに至りぬ、要之本誌が益偏して一種の流潮浩浩として誌上に滔るを見る、如何ぞ其の効果を上ぐるを知らん邪、此に於て乎余は其美を濟し其功を奏する上に於て諸彦の美蹟を索むるも得ざるなり、書に曰く慎終于始、又曰く股肱善哉百工熙哉、余奚ぞ獨り委員諸彦を咎むるの意あらむ、之を爲すは自然に發して勢制すべからざるものあるに依る也、諸彦乞ふ之れを諒せよ、更に全校會員諸君に三省を庶幾ふべきものあり、以て一致同體事に當るべき微志を表はす而已、

都我北辰會は今や帝國が大陸に膨脹し思想界が宇内的大觀を呈し來らんとする一大盛時に中り吾曹半千の健兒が同盟結社として兀たる白山の麓澎たる北溟の濱に生れき

嗚呼六出の瓊華漸稀に兀突たる越山山骨秀づるの時に當り一枝先春を報ずるものは我北辰會雜誌なり續くものは馥郁爛熳たる紅紫千朶か來るものは黒雲驟雨耳根を劈く霹靂乎月色霜を欺き水天彷彿たるものあらん黒風白雨落花片々凍雲皚雪玉屑續結たるものも或は之あらん其來る所つゞ所の何等の光景たるを問はず節は常に皚雪の潔きよりきよく膽は益北溟の大より大に而も帝國が大陸に膨脹するに従ひて北辰の光層一層の明を加へんとは吾曹が造次顛沛も忘れざるところ千難萬障を排して期するところ

これはこれ發刊の辭に云へるもの、

本誌は編輯員の雜誌に非ず諸君の雜誌に非ず我辰章校の雜誌なり我辰章校の校風を外部に向て發揚するの機關なり我辰章校我北辰會の事業史なり諸君は編輯員と共に永く之を忘る可らずこれはこれ第五號片言一束の一節、實に此の如くして初めて北辰會の名實本誌の名實相伴ふものと謂つべし、諸君以て如何と爲す。

之より各欄に就て愚見の一斑を叙せんと欲す、其正鵠を得たるや否やは一に諸君の賢察に任す、論說欄内。劈頭岡村教授曩日講談會席上語られたる馬來群島の歴史を筆録せるもの、余該時事故あり拜聴の榮を得ざりしも、今親しく其文に接するの幸あり、博士諄々講演の實狀を推すに難からじ、想ふに先生爽快の辨灑落の調滿堂の耳目を聳動されしなるべし、主として動植物分布の第一源なる Isolation 即ち Geographical separation を以て群島の變遷を論究せられたるなり、寧ろ Isolation の一好例として説明せられたるやにも覺ゆ、左して奇しからざれど壯快を感じる處しとせず、第二、浦井教授の史料に就きては、史料蒐集の重要にして且繁雜なることを示され、其分類の便を述べられたり、傍證博引東西に亘り、叮嚀懇篤、一讀其意を採るべし、益する所豈に啻に北陸史談會のみならむや、教授前に第壹號より第八號まで號を逐ふて偽作文書研究の一例として、かの彼得大帝遺言狀の全く偽作なるを糺し、世人の蒙を啓き吾人の智を進めらる、教授が吾人を誘掖せらるゝの厚きと共に本誌に心を用ゐらるゝの深き、嘻余輩學生たる者怵悵の情に堪ゆべけん哉、第三、東西文化の調和、面白き題目と云ふ可し、然れども僅に二頁のみ、或はこれ



簡而明矣とも稱すべきか。得能講師の吾人に警告せらるゝ所、其啓導の優渥なる、吾人の慶喜何物か之に過ぎん、「嗚呼帝國は實に世界第一の幸運に際したるなり、吾人學に志す者豈に袖手偷安の計を爲すべけんや」と、先生の元氣寔に吾人を瞠若せしむ、生等焉んぞ發奮興起せざるべけんや、末段現時思想界の紛々擾々なるを慨し乍ら、「今日の狀勢は誠に前途多望なりと云ふべきなり而して能く此の好時機を利用して獨立健全の思想を發揮するは吾人青年の任務に非ずや」と、余輩に幾層の振徳を與へらる、敬服多謝、只疑はしきは、徳川三百年間の文化を助長したるは専ら儒佛の二道に歸せられ、神道に到りては一言の之に及ばれざりしは何が故ぞや、嘗に徳川時代のみならず、上代より下神道が我帝國人民の思想を養成するに與りて力なかりし乎、又二者をして融合せしめたる *Shing egency* にはあらざる乎、否共に融然調和したるにあらざる乎、末尾の文字は *Art is long and time is fleeting* の意歟、意に介する所以て先生の教を請ふのみ、第四は生物の進化論なり、本誌嘗て高瀬氏に依りて再三進化論の應用を出し、今復丸山環君に依りて此論を出す、進化論の本誌に如何なる前世の因縁あるや、聞く是君が京都に在るの時稻葉理學士に就て學びしものに據りて論ぜられたるなりと、理學士の博識なる夙に余の耳にする所、君が敏妙なる筆鋒を以て論究せらる、蓋し見るべきもの多からむ、本誌にはラマーク及ダルウヰン二氏の概説を記せしに過ぎずと雖も、間々余輩の未聞に屬するものなきに非ず、切に今後君が氣焔萬丈の光景を視んと欲するなり。

史傳欄。成島柳化翁は國史專攻の金風樓人の才筆に成る、前後三冊三十又八頁縷々綿々として説

き去り説き來り、翁をして靄然我北辰會誌上に蘇生せしむ、樓人の功も亦偉ならずや、其文を引き詩を引く豊又裕、吾人をして其出處の何れなるやを識るべからざらしむ、樓人の勞も亦大ならずや、而して議論以て之を挾み、涓々犀水の如く巍々白山の如し、加ふるに文章流暢湛々筆に任せて出るもの、如く、讀む者通讀倦を覺えず、其文跡も以て人を傳する一種の範と爲すに足れり、余これが細評を試みざるも、君が此筆致と其思藻とを以て益々砥礪情らずんば其大成期して竣つべきを信ず、金風樓人たる者舊はずして可ならんや、但詩を寫すに往々七言なるべきに六言なるあり助字を遺漏せしなるべし、又時々用語の穩當ならざるものあり、字句の翻弄に過ぎるの邊あり、白玉の微瑾深く咎めざるも可なり。

文苑。雪夜讀書は前號除夜思ひ出の一節を書れたる蓬生庵のものされたるなり、雪に縁みて心を勵ますところ古人に劣らずとや云はむ、趣味掬す可し、文調愛す可し、

歌何れかをかしからざる、戸村氏の「山風に、那古の浦人が「海の原、三誦其餘韻嫺々として盡きざる心地す、福井河原兩氏の士官候補生を送る、さこそと思はれて勇まし、「西の海あるゝのみかは何處にも嵐吹くなり君こゝろせよ」心ありげにて一讀三嘆、撫劍生とは誰なるらめ、其調確かにかつら氏と見たるはひがめか、「事成らはひまらやの峰に日の本の日の大御旗樹てんどそ思ふ、「いさや起きよ起きて銃とれ此春は花に寝るへき時ならなくに、「雲に乗り天にかけらむ龍の身のため潜みて年を経る哉、の三首いかに其心の雄々しく健氣さよ、凜平たる其貌儼然たる其様、優しき言葉にて寫されたる妙手、眞に余も爲めに悶を遣りたり、噫蟄龍天に騰躍する時はいつ、

比馬拉耶山頭旭旗の翻々たる時はいつ、袖時雨は例の花曙散史に依りて其令兄の果敢なくなられたるかなしさの餘り詠まれたる新詩なり、字々皆熱淚句々皆天音、無殘の風雨花を散して鬱々生温き夕、愁傷の聲琴瑟の音に連れてきこゆるごとし、「兄のなきがら影卷て形見とのこるたましるに靡くけふりのふた三筋」見やりたる君がけしき思ひやられ、憐れふかくもうるはしくせられたるものかな、

俳句豆男の「三毛猫はやゝ興あり、」臘夜は實景如何やら、「朝雨の向秀逸とや云はまし、秋竹の「驛路に小雨晴れゆく柳哉」は、春雨の晴れ方に枝垂れる柳のしをらしさ、「春雨とならでくれけり山畑」は、案じ煩ひつゝ山邊に行きつき、卒に雨なくして畑打ち眺めたる心持、長くよみたりと云ふべし、「古寺にのり可なりに感を催さしめぬ、秋虎樂園吐虹諸子の句なきはいかに、

漢文、人品論、時弊に據するの文、嚴整筆を運らす處頑夫も廉に懦夫も志を立つるの風趣あり、但末段語を引くと多きに過ぎ反つて精悍殺人の勢を缺くに似たり、可惜々々、安曇巡遊記、景を叙し勝を畫くの處尤も仙史が得意を視る、能く記の跡を得たりと謂ふべし、晦日の記事白駒橋邊幽閑奇絶を寫し得て余も其處に彷徨ふが如し、仙史已に癸巳の歲此作あり、今や三春秋の螢雪を積む其上達想ふべし、乞ふ其近作を示すに吝なる勿れ、

詩、も亦花木森蔚十七首、漢詩人も大に我校に増したりといふべし、冷骨氏の曉起步園中、香陽陳人が夢游富嶽の詩白眉ならんか、又二氏白山の詩鍊鍛の句、感興遼きものよりせば余はそれ後者を取らむ、大和男子の曉起尋溪梅は、清雅以て吟嘯に適するもの、鏗々たるもの銚々たるもの、

未だ得べからざるも、諸氏益々精鍊の功を重ねばその堂に上るや庶幾からむ、私見當らずと雖も遠からずんば幸甚々々。

雜錄欄。一部二部異様の彩色皆興味あり、以後駢列對應相榮えむとこそ望ましけれ、先王〇先生は目下及羽淵二氏寄贈の好意を謝するの餘り、蠅の話を載せらる、先生の喜悅知るべきなり、而して同志學生の参考となるのみならず、常人に知るところあらしめらる、天外生の地質學的太古の人は、左したるにあらねど近來人類學の當地にも盛んなる頃なれば、目を惹くべき價あり、太瑯樓主人が寄せたる漫遊漫筆は、かつら氏の但書もあれば主人がかねての手腕に似ぬ節もあれど、何處となく大人しきかきぶり濃かなる情緒、依然富贍なるうきぬ氏の文、氏今や大都に在り、龜井戸の梅墨堤の櫻、君が鏞腸をして愈々鎡羅魁麗を尙ふるなるべし、至囑々々、九華生の故郷は、平和の神の鎮座する處となし、世態の日に非にして偽惡に陷るを嗟嘆し、終に故園の絶勝好景を喚起して勢州の山河を鼓吹し、之に代るの樂乾坤何くにかあらんと呼ぶ、其情熱して其語切なり、然れども其文や、字句に拘りし處なき乎、文勢の緩急人をして感動せしむるに至らず、加之悠々熙々其山水に戯れたる其快樂を忘るゝ能はざるを以て、天然を愛するの深き心に歸せしは一層の挫折を來せしに非ずや、凡そ斯の如き文は情を以て勝るべきもの、我動き人輒ち動くを貴ぶ九華生首肯するや否や、山陽梅雨懷郷の詩あり、滿巷深泥雨乍晴、輪蹄絡繹過門行、故園昔日西窓底、臥數黃梅墜地聲、李白靜夜思の詩あり、牀前明月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故郷、

雜報。亦十七頁を數ふ猗熾なる哉、小言一束、豈に曷んぞ此三者のみならん、屈指し來らば十又十、委員の特權許さるゝ限りは、虛心平氣師弟の間に立ちて、經營慘澹其圓滿完壁を勉むべきなり、雜誌の活氣委員の敏腕は信に此一欄に顯はすべきとろろ、武藝大會記事、計十五枚、吐虹生虹霓の健筆を揮つて、我校柔道及擊劍藝古始に於ける赴々たる健兒の活動を細評せり、眼爛に筆達す、實に好個の記録なり、君が盡瘁多謝々々、妄言死罪死罪。



## 雜報

### 初見の辭

不肖生等今回部長の推薦に依り乏を第三回編輯委員に受く、素より身に瓊文を蘊するなく、又吐鳳の才あるなし、然りと雖とも男子應諾して其任に當る、聊抱負する所なきを得むや、諸君に獻する所は唯滿腔の熱誠熱血、驚鈍を鞭撻して請ふ隗より始めむ、千里の駿、九霄の鵬、清才洪筆敢て或は雄篇大作を吝しむ勿れ、由來委靡振はざる校風の發輝の如き、是れ實に生等か夙夜省慮措く能はざる所、又以て微力を竭さずむはあらず、初見に際し一言すること然り

新編輯委員一同謹白

### 金城の春色

雪のみ深く埋もれて膚を裂きにし三越路の寒も

吹き來く東風に追はれて、今は花咲て鳥謳ふ長閑けき空に立ち返りぬ、見やる山々はなほ鹿の子班に雪を残せど、引ける霞の紫色濃く、流るる河は水暖にして、岸の柳いと延ひたり、日うらゝかに風のどけく、櫻梅桃李一時に咲き亂れ餘所に知られぬ春の景色、うかりける月日の後に眺めて心路いとすか／＼し、あはれ幾多の男の子、いかにや春風に嘯くらん、豈に唯落英を合んで少年の春を情むのみならんや

### 運動場裡の春

柳簾れ鶯嬌て花復般に屋外運動の好期は來れり九旬の久しき雪に埋もれて無聊を嘆きしの輩、何ぞ速に一大飛躍を試みて積日の鬱悶を散せざる、運動場裡艸滑にして四邊の光景日と共に朗なり、然るに何事ぞ啼禽獨飛んで亦人影なく、時にロンテニス部員の僅に其寂寞を破るあるのみ、嘗て記す落日醫王の山角を染め疎鐘嫋々

林間を洩れて薄暮の天に度るの時、猶熱球風を起し棍棒地を切て其技を止めざるの士ありし事を、あゝ此等好箇の士今遂に見るべからざるか然れども請ふ怪む勿れ、今年の我校は昨年の我校にあらざ、今や短艇の設けありて其の第一競漕は將に目睫の間に逼れり、嘗て球と棒とを握りしの手は櫂と舵とを取て海若を叱咤し、雄心落々竊に中原の獲鹿を期す、焉ぞ亦想を陸上の運動に致すを得ん、之れ實に世の春に逆ふて我が運動場裡の獨秋色ある所以なり

### 蓮湖湖畔の春

綠楊水に著て艸烟の如く、春風湖面を度つて細漣荻葉を戦がす、此の間小舟の水を驟て白鷗の眠を攪し、縱横馳驅勢飛ふか如きあり、舟を遣るの士顔皆鐵の如く眼睛炯々人を射る、而も風采自ら艚夫に異るもの、是れ豈に我校友か蓮湖の湖畔に端艇を習ふものにあらすや、疎松白砂

春自ら寂寞にして閑鷗の眠を貪りし地、今や幾多健兒の鐵腕を揮ふ好練習地となる、湖神今昔の感果して如何、聞く吾校來る十九日を以て春季競漕の會を開かると、諸士頃來の手腕を表す實に此の時にあり、必ずや一大活劇の俗視を驚かすあらん、中原の鹿夫れ果して孰れの手に歸せん、各部のチャン之を旃めやよ、

### 討論會

二月二十九日、我演說討論部は其第一回討論會を例の會場に開く、論題は曰く

軍備擴張(強兵)と經營問題(富國)と目下孰か急務なりや

午後二時半、出席會員百餘名に及ぶ、乃岩崎先生議長席に就き、開會を宣告し且四高生徒の資格を失はず可成學術の範圍内に於て討論すべき旨を注意す、委員中大路氏は發題者に代て題意を説明して曰く、

こは今日の軍備を其儘にして經營を先にすべきか、或は經營を其儘にして軍備を先にすべきか、にあり。

と、質問の矢は僅に一本のみ。進で二次會に入り、議長は消極主論者の一人築山氏をして登壇せしむ。

築山氏(消)は山鳥の尾的に前口上をならべ立てたる後、瘦軀の病者徒に重甲大刀を具して敵を禦がむとするも其負擔に堪えずして自ら仆れむとす、今の軍備論者皆是のみ」と比喩し進で、國力充實せずして徒に軍備を擴張するの愚なるを笑ひ、終に以太利と合衆國とを對照し

諸君は以たらんとするか、合たらんとするかと大喝一聲降壇するや

石井氏(積)は七枚の原稿を抱へて登壇し、先づ露國の東洋に垂天の翼を張りつゝある事實を列擧し、次で米國の事に及ばむとするや、議長は

再三時間の制限あるを以て要點を摘説すべしと注意す、氏乃ち皆零しますこれも零しますとて歴史により物質的生產發達を是れ謀り戰爭を厭ひ軍備を忽且に付する國々が其獨立を維持する能はざるを確論し、外交の失敗も多くは軍備の緩慢なるによることを説き、軍備を擴張せば以て他國々土上に富源を求め得べし、といふを以て論結せり、時間の制限の爲中段以下其所論を悉くす能はざりしは最遺憾なりき。

池永氏(消)は、富力の在る所即權力の存する所との格言を以て楯となし、國力充備せざる今日に當りては、權道——軍備擴張を捨て、先づ正道——内地經營をとらざる可らず、となせり。此次に演壇に現はれたるは前の演說會に得意の快辯を揮ひ我演說部白眉の稱を恣にし得たる秋田氏(積)なり、氏は各國々性の異なる必衝突を來さざる可らず、衝突最後の法庭は武力にあ

り、と斷じ、尙進で劍の下に結ばれざる外交は成立せず、軍旗の下に擴張せられざる商權は存在せず、と喝破し、説き去り論じ来る明快の辯聴衆をして反對論者顔色なしと絶叫せしむるに至る、然れども見よ、反對の論陣尙幾多蘇張將軍のあるあり、

遠山氏(消)は即其一人、搾り出したるが如き聲を振り立て、熱心に論ずらく、斯の問題の如きは實際的に論ぜざる可らず、日本は尙國力豊富なりといふ可らず、幾多經營問題は目前に懸れるに非ずや、何ぞ他事を顧るの違あらむや、今の軍備を口にするもの、貧乏士族が兩刀を帶し大道にのさばり行くの愚と何ぞ擇ばん。と次に長谷川氏(積)は軍備擴張を急務となす所以の理は(一)數年ならずして大戦争起らむ(二)自衛、(三)世界に對して日本國民の大抱負を實行せんが爲、の三條にあるとを縷説し、

竹内氏(消)は我國の戰闘力は以て國家の獨立を維持し平和を保障するに足る、然るに貿易航海の現狀は尙幼稚なるを免れず、殷鑑不遠獨佛戰後にあるに非ずや、と論じて降壇するや、國府鎮臺一の聲を以て歡迎せられたる

國府氏(積)は立てり、而一二語を怒鳴るの後、驟然として壇を蹴て去る、嗚呼何事ぞ、飛石氏(消)は代て登壇し、反對説を駁せむと試みたれども、議場騒然又囂然冷評熱罵潮の如く、而會員は一人二人五六人退場し初めたり、時は移れり漏刻五時を下る、

議長は乃ちこゝに討論を中止し直に裁決すべきや、又は次回に延ばすべきやを採決す、而も猶二人の主論者が數日精竅の結果、滿腔の熱血を潑がんとして得ざるものあり、彼等はいはざる可らざるなり、異議は出でたり、議長は前採決を取消し更に

笠井氏(消)をして登壇せしむ、然れども會員は既に三分一を残すのみ、氏獨熱涙を揮ふも其の

甲斐なし、暮色玻璃窓を襲ふて此隅彼限のくらがり三三五の語を聞くのみ、ストロアの火はちら／＼として亦殘寒を防ぐに由なし

池田氏(消)勵聲一番、人物養成の必要を説くも聽く人なきを奈何せむ、此時會場に殘るもの、實に二十の黑影のみ、議長は茲に討論終結と見認め之れが採決を命じ、十一の手は消極論(富國)の爲に舉げられ、力なき萬歳の聲は十一の口より發せられたり。是を第一回討論會の概況となす、諸氏が經營慘憺の餘に成れる多血多涙の演説、悉く之を記して傳ふるは事情の許さざる所あり。若夫れ今回の討論會が十一主論者の演説會の如き奇怪の現象を呈し而も始ありて終なきが如く幽靈的なりしに至ては、餘りに主論者多く餘りに時間少かりしの致す所か、當局の

人少しく省る所ありて可なり。(局外生投)

### 臺灣守備兵を送る

朔風凜冽積雪沒脛指墜ち膚裂く遼東の山野、陣雲冪々、殺氣憑陵、夢魂幾度か飛むて還家の情切ならざるにあらずと雖も義勇公に奉する神州の貍貅、忠肝義膽四百州を壓して凱歌聲裡再び故山の風光に浴せしことも愚かや、瘴烟毒霧炎熱焦身人喰ふ鬼の臺灣島、病魔踊跳、蠻民頑迷、其土を守備に派遣せらる、歩兵第七聯隊の三個中隊、三月十四日午前八時盛裝燦然、武歩整然、金澤城を出發す、香林坊頭之を送る我校の職員生徒、見送る人々の心々に或は勇壯、或は哀痛、而かも知らずや、赳々たる武夫の意氣は四十八蠻眼底になく、熱帶の烈日鐵身を試嘗さむと願へることを、臺灣は我領土、土人は我同胞、職責守備に在り、蹶起して行かむ也

### 射擊豫習



三月十五日(日曜日)なり、第二學期試験は數日に迫れり、而して斯道熱心なる好漢諸子、其休日なるに關はらず、其多忙なるにも係はらず、射撃豫習を上野射撃場に施行す、其景况成績之を知らずと雖も射撃會當日の伎倆豈に此の際瞬々に養ひ得たる所なしとせむや

## 第二回國民大射撃會

由來本校は北陸地方の大立者なり、學術に於ても、運動に於ても、

擊劍に柔道に弓術に「ベースボール」に「ローンテニス」に將た又射撃に常に此か牛耳を執る者本校にあらずや、能く學ぶ者は能く運動す、予輩か運動するは身心を鍛鍊せむか爲めなり、身心を鍛鍊するは大に學はむか爲めなり、大に學はむと欲す、故に大に運動す、本校にして果して能く運動界の木鐸たるを得是れ亦學術界に翹楚たるを得る所以、

尙武思想養成の目的を以て組織されたる第二回國民大射撃會は豫定の如く三月廿九日より三日間上野射撃場に於て催されぬ、今乙種受賞者二百名中百等賞以上を得たるものを擧ぐれば

二等 柏原省私 五等 吉村政行  
 十三等 渡 孚貞 (右自四十六至四十點)  
 二十四等 磯田正謙 三十二等 光町三郎次

(右三十九點)

四十二等 加藤範次郎 四十三等 山科祐二

四十六等 日下庄太郎 (右三十八點)

六十八等 青木澤五郎 六十九等 深澤新一郎

七十三等 川越留松 七十五等 宮地彦八郎

(右三十七點)

九十七等 野崎安近 百等 横地銳二

(右三十六點)

右は十二發滿點六十點に對する者にして此他二百等に至るまで猶許多あれとも略す

因に記す、三月廿一日より三日間淺野川上流金澤射的會に於て開業一週年祝宴を催したる時、優等三十名中最優等の名譽を得たるもの之を越智儀造君とす

## 春季休暇

二人相會し相笑つて曰く、何ぞ汝の面の眞黒なるを、而して己れか面の眞黒なるを知らざるなり、一人を呼び孰れか黒きを判せしむ、其人曰く、我未だ漁夫の汝等の如きを見ずと、而して亦己れか面の等しく眞黒なるを知らざるなり會する者四五又六七而して話柄は皆此の眞黒なる顔色の品隣に在り、偶一先生あり、傍を過ぎり微笑して曰く、急に「テグロー」の學校か出來ましたと

春季休暇は旅行の休暇なりき、晴天續きて旅行に最も適したる休暇なりき、此際此時徒に閉居して浩然の氣養ふに機なかりしものは不幸の人

能登周遊を企てし者幾組、鑛山廻り温泉廻りをなせし者幾組、短艇競漕の下替古に餘念なかりし者幾組、而して歸省父母の慈顔を拜し昆弟の愛情に浴せし者幾何人、嗚呼旅行は一年一年より盛むなり、豪傑の士、學者文人其膽と其識と古來多くは此を旅行中より涵養し來る、旅行の流行亦賀すへきかな、然りと雖ども彼の貴公子然たる御旅行は予輩斷して之を取らず、否な深く之を惡む

## 故有栖川宮殿下紀念樹栽培の檄

神州古來武を以て國を立つ、而して今日開國進取の國是に應し、身軀を鍛鍊し大に尙武の風氣を發輝し敵愾の精神を喚起し、規律共同從順の三德を涵養するの具は兵式肄操に若くはなし、是れ本校の夙に之を採用する所以なり、明治廿二年六月三十日 故陸軍大將有栖川宮熾仁親

王殿下、嘗て當地方に御巡回ありたる時、本校は殿下の御來臨を辱うし、乃ち本校肄操場に於て本科豫科の中隊運動及び補充科の柔軟肄操を殿下の尊覽に供するの榮を得たり、當時殿下は深く本校兵式肄操の進歩を嘉賞せられたりと云ふ、是れ實に本校の大名譽とする所也、爾來星霜を経ると茲に七年、當時の學生概ね業を卒へ舊去り新來り、遂に我兵式肄操場は如此大光榮の歴史を有する地なることを記するもの幾と稀なり、是れ生等か大に遺憾とする所以なり、是に於てか生等相謀り、殿下御臨場の時、御席を設け玉履の印せる地を相して此に一株の櫻樹を培植し以て長く殿下御臨覽の紀念とし、且つは本校兵式肄操場の光榮ある歴史を表彰し之を無窮に傳へむと欲す、若し夫れ此紀念樹を培植する後本校學生、大空一碧天氣清明の日、或は天地暝漠黑雲慘憺たるの時、數百の壯士劍を掲げ

銃を荷ひ、風雷叱咤此の場に進退驅馳するに當りてや、常に此の一株の紀念樹を見て恰も親しく殿下を拜するの思を起し俯仰感慨、深く殿下の卓犖たる英姿を追懷し、赫耀たる盛徳を追慕し、益奮起躍躡心血を濺て之に従事し、規律嚴肅舉作迅烈真個に英風爽颯たる神州尙武國の健兒たるに慚ちざるに至り、以て殿下優渥の褒詞に對へ奉らむと欲す、加之一旦緩急あるに當りては又以て義勇公に奉するの素を養ふに足る可し、伏て惟るに殿下は實に中興の元勳、大業に翼賛し、偉功勳績の赫々たる古來無比、内外共に仰き瞻る所なり、然而して殿下曩に征清の役大譴に廣島に従ひ、夙夜帷幕に侍し都督勝を制するの任を盡さると雖とも未だ王師の凱旋するを見給ふに及ばずして薨去あらせらる、是實に同胞四千萬の痛哭する所以、爾後東亞の風雲益急ならむとするに際し、生等殿下の御盛徳御

偉業を欽慕するの餘、益紀念樹を培植し以て甘棠遺愛の意を表せむとす、請ふ學友諸君奮て此舉を贊助あらむことを

發起人 本校本部三年生一同

### 漕艇撰手選舉

福岡 祿太郎  
近藤 他家雄

此は是れ生徒控所に掲示されたる大洋紙四枚の大々的廣告なり、雜報子其全文を借用し劣筆に代ゆと云ふ

### 短艇會役員

會長兼會計部長 大島 校長  
庶務部長 木村 竹治郎  
修繕部長 野田 忠廣  
乘艇部長 佐野 安麿  
會計部員 佐治 修三  
庶務部員 鶴見 左吉雄  
中大路 正雄  
古澤 鍵次郎  
中大路 正雄

日清戦争は大戦争なりし、精神物質兩界は此か爲めに非常なる影響を蒙れり、海國たる日本の國民か海國的思想を養成鼓舞せざる可からざる必要は一層明瞭を加えぬ、世界の日本國民は彈丸黒子最爾たる小島に齟齬せず、垂天の大翼水に撃つこと三千里、扶搖に搏て上ること九萬里而して豈に僅に南を圖るとのみ云はむや本校短艇會を設立してより月を閲すること茲に八、今陽春駘蕩の候、北海の波瀾を凌きて第一回競漕會を催さむとす、古來未曾有の大偉觀、而して當日の大偉觀は實に夫の撰手競漕なる哉撰手選出區劃は

一部(一年、二年、三年)

二部及三部(同上、醫學部を加ふ)

修繕及乘艇部員

豫備科(全塾)

生れて始めて「オール」を握りし者大多數を占むる會員は未來の撰手其人に乏しからざるべきも現在の撰手たること能はず、三月廿五日選出の結果、多くは此れまで他地方に於て數度の功名手柄を顯はせる人々に歸しぬ、其姓名の如きは請ふ次號に於て氣餘萬丈の當日景況と共に報することゝせむ

長途行軍

全校短艇競漕準備の爲め東奔西走熱衷狂氣せる間に福井地方に向つて八泊行軍の揭示出てたり

- |     |      |     |     |
|-----|------|-----|-----|
| 第一日 | 金澤發  | 第二日 | 未定  |
| 第三日 | 大聖寺泊 | 第四日 | 坂井泊 |
| 第五日 | 福井泊  | 第六日 | 丸岡泊 |
| 第七日 | 山中泊  | 第八日 | 小松泊 |
| 第九日 | 金澤着  |     |     |

三年鳴けども飛はず每春每秋行軍の噂聲、噂聲

高くして實行を見ず、失望又失望、忘れぬは想ひ出しもせず、鳴きても敢て人を驚かさざりしに愈飛んで福井地方に至らむとす、聊以て累年の不幸を慰するに足らむ、春は健腕長權を揮つて海若を斬り、秋は鐵脚地軸を動して鰻公を駭かし、春或秋に於て長途行軍を催すあらは倦惰の心須幾くは壓倒し去つて、勃々たる元氣五躰に充足し彼岸無涯の學海も躊躇なく恐懼なく進むを得む、行軍當日の壯烈を豫想し拊舞措く能はざるもの予輩のみかは

片々記事

學期試験、三月廿三日より第二學期試験施行あり、一週間の腦病も直ちに癒ゆめり、次て來る春季休暇に、

時間改正、四月八日第三學期に入り午前第八時始業、火金兩日の倫理講話は午前第七時廿分より、

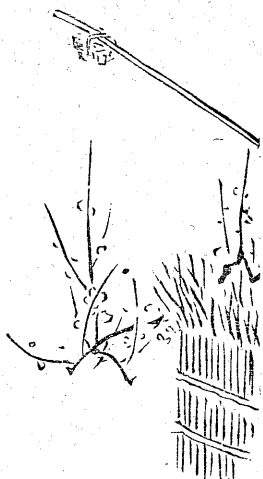
陸敎、敎授野田貞、小川勝陳兩氏は何れも高等官六等に陞敎せらる、

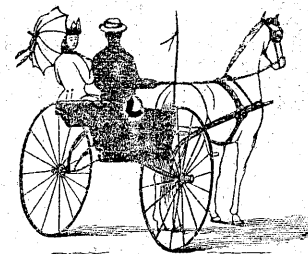
短艇競漕、四月十八日は本校の紀念日にして種樹日なり、其翌日こそ大競漕會當日なれ、萬か一にも降雨暴風ならは順延す

長途行軍、未だ定日の揭示なけれども恐らく廿三四日ならむ、揭示なきは風雨の爲め競漕會の延期計り難ければならむ、兩壯舉の爲め切に十九日の晴天ならむことを祈る、

金城學友會、加越能三州人士の組織にして其目的とする所、先覺後進相互に氣脈を通して啓接善導、關鄉固有の徳風を養成し元氣を振作するにあり、三月十二公會堂に於て第一回大會を催すと云ふ

任命、西田幾多郎氏獨逸科講師囑托せらる





## 投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし  
一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず  
一 雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さるべし

明治二十九年四月廿九日印刷  
全 年四月三十日發行

編輯兼發行者

印刷者

發行所

印刷所

河原始二

春秋在文

第四高等學校北辰會

株式會社 英舍

金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

金澤市八坂町三十三番地

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

中  
心  
文  
庫  
第  
一  
卷  
第  
一  
冊  
第  
一  
頁